



將棊講義

11
401

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



将幕海裁

11-401

将素研菴云海集



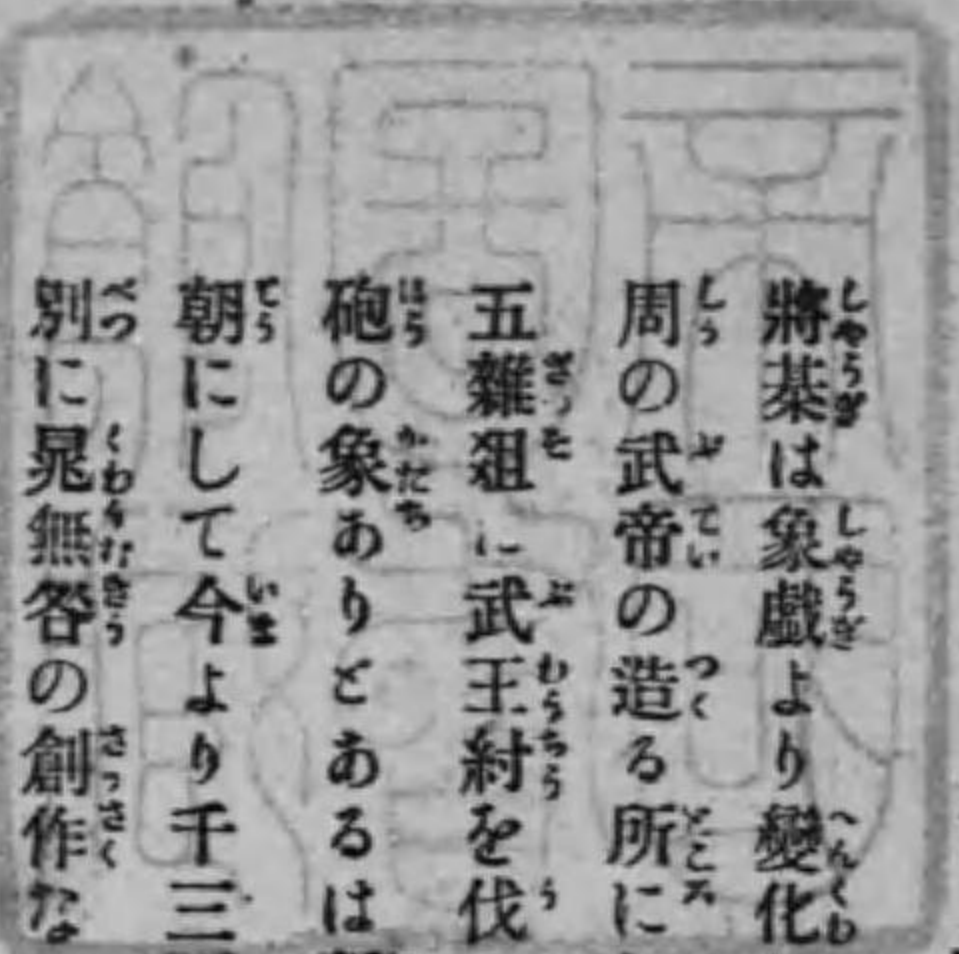
将素海人裁

大正
9. 11. 26
内交

富之庄書店

將 碁

將碁の起源



將碁は象戲より變化し來りたるものにして象戲の起源は和漢三才圖會に太平御覽を引きて曰く象戲は周の武帝の造る所にして其の臣王褒之を行ふ、日月星辰の目あり云々(龍頭將碁起源補遺を見るべし)五雜俎に武王紂を伐つ時に象戲を作るなど見えたり、又宋の司馬溫公象戲圖を作る、將士歩卒車馬弩砲の象ありとあるは所謂る七國象棋といふものなるべし、右に記したる周の武帝とは本朝欽明天皇の朝にして今より千三百餘年前に在りて其の象戲とは今の謂ふ所の大象棋なるべし、象戲又象棋と書し別に晁無咎の創作なる廣象棋てふものあり、廣象戲は今傳はらずといふ、其の盤面は縦横各々十道にして碁子三十一なりと云ふ、七國象棋に縦横各々十九道にして碁子九十八ありと云ひ傳ふ、此の七國象棋何時ぞや朝鮮より本邦に渡りし時に見たる人の言とて傳ふる所によれば盤は三間四方の大きさにて竹もて作れる棒の如きものにて七人して取圍み指したりとか、是れらも今は廢りて知る人なし、兎に角廣象戲、七國象棋の如きは一時の作物にて稍々流行して後世に傳はりしものは大象戲即ち象戲(象戲に大の字を附したるは後に中象棋、少將碁の名目出でしによりたるものなり)のみにし

て其の象戯は前記の後周又は同時より遙か前なる春秋戰國の頃に創造せられしものにして目下の將棋とは大に趣きを異にし、其の技倆も甚しき懸隔あるものと知るべし、序でに云ふ此の象戯は目下の將棋よりは寧ろ西洋將棋に酷似せるもの、如し、西洋將棋は縦横各々八道にして六十四格なり、其の創始に付きては諸説多く或は希臘の賢人シロの作なりとか或はピリュス王の製なりとか又はバラメデスがトロイ城を攻むるとき軍人消閑の具に充てんが爲に作りしとか云ふなれど十字軍の際に東方即ち亞細亞より傳へしものたるの説眞に近くして其の起原は支那、印度等に出でしものなりと云ふ。

象戯の渡來并に將棋の創製

象戯即ち大象棋の本邦に渡來せしは何の時たるを審にせずと雖も今より七百五十年前なる近衛院の康治元年に攝政賴長新院に參りて源師長(一に師仲といふ)と象棋を指せしこと賴長の臺記に見えたりといふ當時賴長廿三歳にして才學勝れたる人(宇治の悪左府なり)なれば當時専ら流行せしものにも非ざるべし遅くも藤原氏の盛時に渡來したりしものなるべし、雙陸は古來流行せしものにして持統天皇の時既に其の禁令ありしはごなれば本邦人の此の般の遊戯に習ひ易き特性あるを以て象戯の如きも渡來後は双六に代はりて流行せしものと見え、其の後は屢々諸書に參見する所ありしも大象戯にては其の運用は變の術に乏しく常に物足らざる感ありてか爰に中象戯なるもの起れり、中象戯は一條

禪閣(此の説疑はし)創製にして鳳凰、飛鷲、角鷹、などの馬銘あり今も行はれて其の指し方も伊藤宗看の書き物などあり、去れど聞く所に據れば中象戯の技倆も將棋に比しては僅に初段位に止まり、其の技の奥妙變化の活機に乏しく到底神機鬼巧を極むるに足るものならずと爰に於てか始めて將棋なるもの起る、將棋何時何人の創製に係るか確かならざれども殆ど四百年前なる文安三年の著書に載する所あるを以て見れば其の以前に創製せられたるものにて或は云ふ、奈良朝以前のものなりといふも排斥すべからざるが如し、(龍頭なる將棋起源補遺を見るべし)去れど中象戯の飛鷲を飛車とし、角鷹を角行と改めたるが如き痕跡あるを以て見れば中象戯は文安年中に顯官たり盛時たりし一條兼良の作と謂ふは誤れるものなるべし、一條禪閣の多藝多能なるより附會したるものなるべきか、象戯は物象を基子とし、將棋は將校士卒を基子としたるにて遂に其の變幻出沒窮まりなき妙を顯すに至れり

將棋の大家

將棋の大家は大橋宗桂を元祖とすべし、宗桂九段の名人たりしを以て最初織田氏の選拔を受け、尋いで豊臣氏を経て徳川氏將棋所に入り之を主宰せり、後安永より文化の初年に涉り大橋宗英出づ、宗英出藍の才を以て前輩を凌駕し空前の名手たりしが尋で二世伊藤宗看出づ、初世宗看は名人伊藤宗印の二男にして其の一族皆當時の大家たりしは斯道の榮と謂ふべし、宗看の兄印達は年僅に十五にして

五段に進みしが不幸にして天せり、弟宗壽は大橋家を襲ふて名人と爲り、同く看恕は七段に進み、同く看壽は八段たり、得壽は五段たり、其の子宗印其の孫宗看世に之れを鬼宗看といふ、其の技神に入りしを以てなり、父祖伯叔共に名人たり皆大家たうしを以て幼より先天遺傳の特質と稟性の穎悟とにより技術日に進み遂に名人たり、然るに宗看の晩年に至り、爰に一の神童を生ず、天野留次郎といふ、六才にして宗桂の門に入り十三才にして三段に進み十五六才關西を巡廻して盛名を博し尋いて五段に進み、薙髮して宗歩と稱し、空前の大技倆を顯し斯道の神聖たり、宗歩の後は伊藤宗印名人たり其の技亦當世に冠絶し古名人を凌駕するに足りしが惜いかな明治廿七年病没せり、尋いで當時の大家たる大阪の人小林東四郎（八段の格）武州所澤の大矢東吉（八段）等の諸名手逝き今日に於ては小野五平氏（八段）登加利永祐氏（八段の格）小菅創之助、關澄伯理、松坂福四郎（共に六段）の諸氏を名手とす、相川伊三吉氏弱冠にして技五段に超えたり將來の名人たらんか。

將棋を學ぶ心得

夫れ將棋の技術たるや、双方總計四十個の駒を以て盤面八十一格の裡を横行し機を視て變に應じ奇謀策出して縦横舒卷千變萬化窮まり無きものなり、夫れ然り其千變萬化窮まり無き裡に駒を驅りて相戦ふもの、焉んぞ運用の妙一心に存する所なきを得んや、然り實に運用の妙一心に存すと謂ふと雖も亦

た其進退攻守法軌の據て以て則るべきものなくんばならず、是れ古今の名人上手が洪範を遺し又後進者は皆其洪範に據て其道を研究する所以なり、此の如く言ふ時は將棋の技術たるや學ばずして其法を知り得らるべきものに非ざれば、苟くも此茶道の妙を樂まんと欲する者は其法を學ぶこと決して之を忽かせにすべからず、夫れ然り而して將棋を學ぶも、元來此茶道は一種の技術なるを以て之を學びて其名人上手となり得ることは決して一朝一夕の業にはならず、必ずや數年の歳月を費して以て漸く此れが上達を期すべきのみ、然れども人孰れも生業のあるあり何ぞ罷く其生業を措きて一に貴重の歳月を費し將棋を學ぶを得べけんや、左り乍ら人生一種の娛樂を取り、或は思想を鍊る爲めの技術として夙に行はるゝ限りは之を學び之を玩ぶことをせざるを得ず、随つて又此れに上達することを冀はざるを得ず果して然らば將棋を學び其上達を期するには僅少の日子を以てするより善きはなく僅少の日子を以て上達を期せんとせば、定時科業の方法に據るを可なりとす而して本書の主眼とする所も亦茲にあり、若し夫れ初學者にして眞實に將棋を學び其上達を期せんと欲せば、正直に本書に記す方法を履行し其少しも違ふ所なく又倦む所なきに於ては、必ず三十日間にして能く將棋の段階初段の上に出んこと敢て疑ひある可らず。

茶道の敬禮

初學者が名人上手と將棋を指すに當りては、最も敬禮を重んじ聊かたりとも輕侮の心あるべからず、其碁盤に直る時は先づ凡そ我膝頭より五寸ほど間を置いて坐り、衣紋を正ふし頭を少しく垂れ、何分宜しく教へを乞ふ旨の挨拶をして徐ろに指し始むべし總じて碁盤に對して居る間は思考を要すること多きが故に、煙草を喫ふて尙ほ思考力を扶け、或は團扇を使ふて暑を攘ふなど心に之を欲することも、漫りに之を爲すは上輩に對して大いなる失禮なれば、若し煙草を喫い團扇を使ふ時などには宜しく相應の會釋あるべし、又碁盤に對したる上は勝負を争ふこと當然なりと雖も、猥りに下手が上手の指し方に逆ふは非禮と心得べし、又下手の指したる駒の模様依りて上手が別に指し方を教ふるあらば、謹みて其教へに従ひ聊か背くことあるべからず、之を要するに禮は他を敬ふを主とするが故に下手が上手に對するには努めて敬ひの心を外に現はし、禮儀を亂さざること何より肝要と心得べきなり。

碁碁十五訣

第一 先察ニ形状ニ

(解) 形状とは彼れと我れと盤面上碁駒の配置如何を視察することにて、此語の主要は苟く輕躁に指すことなからん様にとの誠めなり。

第二 須視ニ親疎ニ

(解) 親疎とは我此駒を斯く指して次で我彼駒と勢力を合せ、或は我此駒を斯く指したらんには彼れ敵の駒は死地に陥るべきや否やと、總じて駒々の縁の遠

いか近いかを云ふ故に、此心は碁盤に對しつゝある間は、少しも忽せにすべからずとの謂ひ也。

第三 審察ニ虛實ニ

(解) 敵駒の指し方虚か實か、何れにしても謀計ある事ならんと思はれ、即ち審かに其虚か實を候ふて我方略を定め、然る後に指し合ふべしとの意なり。

第四 奇正互交

(解) 碁駒の進退掛け引きは常に定つて正しき法のみ依るを得ず或は時として計略にかけて敵を負すの策をも取らざる可らざれども、要するに奇正應夫れ宜しきを見て施すべしとの謂ひなり。

第五 避殆乘隙

(解) 我駒の殆き場合は之を避け、敵の方に少しなりとも不締りの所あらば、我れは進んで彼れを攻むるに躊躇すべからずと云ふにあり。

第六 佯北勿從

(解) 佯は偽りの義にて北は逃るを謂ひ、從は追ふの意なり、此誠の要は敵が我れを試みん爲めに欺計を施し逃る時は、我れ敵の跡を追ふこと宜しからずと云ふにあり。

第七 冗濫不苛

(解) 無益の駒を打たり或は謂れなき駒を奪はれたり、或は猥りに法に外れた駒の進退をする事は、宜しからずとの謂ひなり。

第八 與奪是命

(解) 取らるべく思はれぬ駒を奪はれ、又は奪はるべく思ひし駒を取り去られ

第九 濟敗共竝

ぬ事あるは、唯だ是れ自然の理數に任するより外なきを云ひしなり。

(解) 假令一步たりとも我駒にして之を敵に取らるゝ時は、我れの全體に影響を與ふべきは、是れ甚だ看易き道理とす故に一步の取られんとするも駒を濟ふ時は、其利我れの全體に及ぼし又樞要の所にあらざるも、之を敗らるゝ時は、我れの全體に害を及ぼすに至るべしと云ふにあり。

第十 援勢於逕

(解) 我駒に應援せしめんが爲め打つ駒は、成るべく其應援せられん事を待つ所の駒と、縁近きを要すとの義なり。

第十一 長線横斷

(解) 闘ひの線形長くんは其半ばより割き斷ちて、敵の勢ひを挫くを云ふにあり。

第十二 王陣宜挫

(解) 王將の居る陣營は、必ず相應の守衛あるを以て整ひに之を攻め落さんと欲せば、反つて敵の守衛を堅ふせしむることあるに付き、苛くも王陣を攻めかければ一躍して徹底に打破る丈の策立ちたる上にすべしとの謂ひなり。

第十三 出圍利開

(解) 總じて敵に圍まれんとし、若くは既に圍まれたる時は一に唯だ血路を開き逃るに便利なる方略を用ひ、決して更に其血路に衝る所へ賛駒を打ち、或は居駒を向けなどして血路を塞ぐ事あるべからざるを云ふなり。

第十四 防ニ守於險

(解) 敵より攻めらるゝを防ぐには、險固なる所を能く擇み分け其處に據て以て敵の攻むるを防ぎ守れとの義なり。

第十五 厭レ驅ニ伏駒

(解) 俗に待駒を使ふは碁道に於て最も厭ふべく忌むべき所と爲せり此上の語も亦た其待駒を設けて勝ちを制せんとする拙陋を戒めたるものなり。

凡そ將碁は最初に摩訶大々象碁、泰象碁、大々象碁、大象碁、中象碁等ありて夫々妙技を顯し戦ひしと雖も、其駒數多くして活用の道も從て繁雜なる、故に後奈良帝の時藤原晴光、平貞孝等相議し始めて碁子四十を以て其技を弄するに至れり是則當今行はるゝ將碁なり總て法術兵機に寓し其活用の妙を極め變化際限なく快樂に資する者益盛なり王を以て大將軍とし金銀は即親兵にして常に王將の左右に列し能く防守す龍王、龍馬は先鋒を司どり將軍とす歩兵九隊前に排列し香車は一躍して敵陣を瓦解し桂は奇策を弄し妙技も又俱に顯る局面八十一格碁子四十吾敵に當れば敵と應じて逆ふ一進一退魚鱗鶴翼闘亂して終に敵の邪に乗じ勝を制す凡て運用の妙其間を存す。

將碁の定跡

抑も定跡は六枚落を始として五枚落、四枚落、三枚落、二枚落、飛香落、飛車落、角行落、右香車落左香車落、平手以上の十一網より總ての方則顯れ又變化も際限なし諺に名人駒組なし只其時の能手

を以て駒組とすと言ふ既に運奥に達しては如斯本書は其理論と應用とを詳細に説明して初學の便に供す定跡を學び深く活用に注目し順次を正して練習すべし熱心の人は寝ても駒組を忘れず胸に定跡を暗じ駒組をなしありといへり其方則の正しきを知るべし元來駒落は古へ二枚落以下の定跡なかりしが十一を大橋宗桂の門人天野宗歩の發明にして新定跡として六枚落迄の定跡顯はる故駒組の定跡あり定位とは甲乙相對局する時は上手下手の階位を定め下手は上手の指手を受けて前に記せる十一網の手合によりて指初むべし尤も下手方は起手駒の活用を主旨とし意味相應じ敏活の手段を廻し駒を放れぬ様必悪くべし上手に於ては駒落の弱身あれば必ず下手方は其弱點に附込全力を盡して攻むるを將棋の秘訣とす一手たりとも猥りに指すべからず思慮を廻らして空手なき様注意すべし。

駒組の方則

左に掲ぐる事項は適切なる心得にして能々熟讀すべし。

- 一助言決してす川敷事
- 一相手の持駒成可問まじき事
- 一駒並ぶる時上手へ王を渡し下手は玉をならぶる事
- 一同し手三度に及ぶときは仕掛方より替るべし之を干日手といふ

- 一王は早く片付くべし
- 一角の筋道妨ぐべからず王角の道用捨すべし
- 一王の脇金銀離るべからず
- 一金銀歩の頭上ること見合すべし金は別して進む事速にして退く事遅し
- 一飛車角行の捨場大切なり乍然場合に於て惜むは悪し
- 一桂の飛び見合せ肝要なり遅き時は勝少し早き時は損となる
- 一持駒直ぐに當るやうに打つは常なり願はくはふくみありて打つべし
- 一駒は萬事放れざる事
- 一龍馬は手前にて遣ふ可き事
- 一龍王は敵地にて遣ふ可き事
- 一駒は打込みて取らぬと勘考すべき事
- 一王逃ぐるに能き手ある事
- 一端の歩は猥りに突くべからず手後れになる事多し
- 一香は一通りの駒なりとも端の仕掛肝要なる事
- 一駒は手に持ちては働き格別なり歩は勿論の事

一敵の歩切熟考すべき事

一步二ツより大切にすべき事

一手前に歩打つ事尤も大事なる事

一凡て五筋及端に手段多くある可し注意すべき事

一凡て勝つ事は已れが駒組を能く準備し而して謀る事をなすべし十分に勝と見認たるときは此限に非ざる事

一進んでは其駒にて前を守り而して仕掛る是組立の大意上手の所作なる事

一駒組の定法は双方能き手を撰んでの事なり敵定法を變じ仕掛る事有りとも驚くべからず必ず末に不利の處出來て敗るゝ事

夫れ將棋の盤面は長さ一尺二寸幅一尺一寸其野縦横各九總計八十一局碁子四十一ツの王には點を加て玉とす、是天に二ツの日なく地に二ツの王なきに象る金將は極官銀將は是に次ぐ飛車は大將角行は副將の如し凡て將棋を學ばんと欲せば先づ次圖に示せる如く盤面の符號を知了する事肝要一手毎に盤面の符號と引合して修練する如きは實に迂遠の策にして胸中に記憶する事は碁道に入るの階梯と知べし

盤面の符號

盤面符號之圖

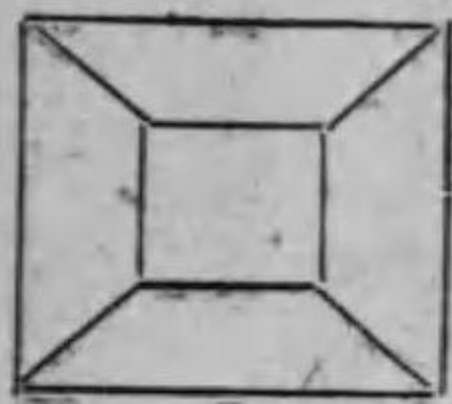
一ノ一	一ノ二	一ノ三	一ノ四	一ノ五	一ノ六	一ノ七	一ノ八	一ノ九
二ノ一	二ノ二	二ノ三	二ノ四	二ノ五	二ノ六	二ノ七	二ノ八	二ノ九
三ノ一	三ノ二	三ノ三	三ノ四	三ノ五	三ノ六	三ノ七	三ノ八	三ノ九
四ノ一	四ノ二	四ノ三	四ノ四	四ノ五	四ノ六	四ノ七	四ノ八	四ノ九
五ノ一	五ノ二	五ノ三	五ノ四	五ノ五	五ノ六	五ノ七	五ノ八	五ノ九
六ノ一	六ノ二	六ノ三	六ノ四	六ノ五	六ノ六	六ノ七	六ノ八	六ノ九
七ノ一	七ノ二	七ノ三	七ノ四	七ノ五	七ノ六	七ノ七	七ノ八	七ノ九
八ノ一	八ノ二	八ノ三	八ノ四	八ノ五	八ノ六	八ノ七	八ノ八	八ノ九
九ノ一	九ノ二	九ノ三	九ノ四	九ノ五	九ノ六	九ノ七	九ノ八	九ノ九

將碁之心得

將碁盤の製法。將碁盤にも一定の方尺あり、是れ將碁所の制にして家元の格守する所なり、蓋し初段以上の人に至りては坊間小厮車夫等の對局と異なりて指し方にも嚴格なる動作あるものなれば其の盤制なども格守するものなるべし、碁く所は只品位を重んずるに在るのみ、讀者をふ泥むなかれ。

盤の寸法

長さ一尺二寸 幅一尺一寸 厚さ三寸五分 足高さ三寸 總高さ六寸五分 盤裏面の穴は左の如し



穴幅 二寸四分
同長 二寸六分
底中 二寸一分

動作。將碁盤に對しては盤を離るゝこと各々四寸にして端坐するを法とす、對局中は箕踞せず立ち膝せず、欠伸せず、雑言せず、碁子を以て盤を叩き、碁子を噛み、碁子と碁子とを打ち叩くが如きは宜しからず、双方の頭相近づきて鉢合せんとするが如きは見苦し云々。

按ずるに此の動作を羈束することは或る點に於いては必要なるべしと雖も之を以て諸人に規則立てんとするは甚惡しきことならん、何故なれば將碁の技倆の進むに隨ひて盤面の明るくなるものなり、盤面の明るくなるに隨ひて盤を離るゝこと自然に遠く又思慮の熟するに隨ひて端坐するを勝手とするに至り碁子を叩き盤を叩き頭を垂れ欠伸するの邊なきに至るものなればなり、去れば自然に技倆と共に動作の正くなるは當然なれども假にも之を責むるは却て碁の進歩を妨ぐるものあればなり。猶次ぎに將碁駒組み大法を掲ぐるも持駒問ふことなどは拘泥すべからずといふ。

駒込の大法

- 駒並ぶる時貴人又は上手の方へ王を交し已れは玉を取るべきこと
- 同じ手三度に及ぶ時は之を千日手と唱へて仕掛けたる方より止るを大法とす
- 玉は早くかたづくべし
- 玉は角の筋を用捨すべし
- 玉の脇に金銀離るべからず
- 金銀歩の頭に上ること成るたけ見合はすべし、金は進むこと早く退く事遅し
- 桂の飛び見合はせ肝要なり、遅き時は勝ち、少し早すぎれば損となるべし

○持駒すぐに當るやうに打つは常なり

○諸手ふくみありて打つべし

○端の歩みだりに突くべからず、手後れになること多し

○駒を手に持ちては働き格別なり、歩は勿論大切なり

○飛角の捨て場所大切なり

○駒離れざるやうに進むべし

○龍馬手前にて使ふこと宜し

○龍王は敵地にて使ふこと宜し

○駒打ち込んで取らぬと考ふべし

○玉一手前に逃げ置くこと名手なり

○手前に歩を打つこと大事なり

○進んでは其の駒にて前を圍ひ前を圍んでは仕掛けること駒組みの大法にて上手の態なり

○總じて勝つ事を能とすべからず、手前を全く守り負けざる事を肝要とすべし、然る時は自ら勝ちに向かうべし

○駒組みの定法は双方善き手を撰んで指すなり、相手方定法を離れて仕掛ける事ありとて驚くべから

ず、必ず末に至り指し悪きことあるなり

○銀は千鳥に使ふべし、金は直、横に使ふべし

右の條々堅く守るべし、但し駒落としたる時は金銀を手強く繰り出すを善しとすべし、桂の打ち場三筋に手あること、五五の歩及び端の歩突き起し宜しきこと、相手の持駒に香車あらば油断すべからずとなり。

稽古の事

將棋の稽古は先づ定跡に依らざるべからず、而して定跡は平手及び香車落を熟習すべし、若し地方なごにて自分より上の指し手なき時は名人の手合を熟習すべし、定跡と手合を温習するの外に詰め將棋は興味深きもの故に時々之を調べ見るときは碁道自ら機敏になりて宜きなり、將棋も圍碁と同く一手の前後にて機を變ずるものなれば一手も無駄を指すべからず、且上手に向ふては恐れず強く指すべし。



●定跡

武術に型があれば將棋には定跡がある、柔道の型も剣道の型もいざ實戦になれば、決して其の型の通りには行かぬ、將棋に於ても亦等しく實戦に臨みては定跡のみに拘泥して指せるものではない、抑柔道も剣道も始めから形の有つたのではなく實戦の場数を經たる武士が其經驗の上から按じ出してかくきり込めばかく受留る、斯く組付けば、かく避くるがよいと、其最良ろしと思へる型を編出し作り上げたものである將棋に於ても亦古の名人上手が實地に於て苦心慘憺の結果、斯く攻むればかく守るのが最良の手段であると教えた型則ち定跡である。

如何に道場に於て木剣を振舞はす事が上手でも白刃を交へた事のない劍客は心膽が鍊れて居らぬ、何程定跡に精通して居ても實戦の場数を經る者は其活用の手段に於て缺くる處がある世には定跡の一部分を能く誦する者で實戦に於て敗を取るのには彼の半可通の劍士が道場戻りに人を投げんと思つて反對に投げられたに同じいにはあるまいか、敵は擊劍の型も柔道のすべも知らぬが去りて喧嘩には馴れて居る、木太を振舞はす事には自然の妙を得て居る、下手の棒銀にそこばくの定跡通が見苦しい負を取るのには、定跡の罪でなく其者が其活用の道を知らぬのである、彼に投げさせて後に勝は柔道の妙、彼に指させて後に敵を征するは定跡を學んだ効であらふ 定跡を學んだ始めに負けの多いは其活

用の道を講せずして唯自己が覺えたる定跡に敵を嵌め込まんとするからである、敵の指手段に依て其受方を考ゆるは定跡の教である。

●修養の談片

將棋に指を染めて其趣味を解し面白味を覺えた人は皆少しにても強くなりたと思ひ、而して如何にすれば強くなり得るかの手段を先輩者に問ふのが常である、然るに其答は、指せば強くなるといふ、文句が御定まりに、なつて居る、孰れも斯る單純なる指導では満足せぬ、著者は曾てより、多くの先輩に面語する度に常に此の問を繰返して得たる修養の談片を一々記載保存しありしが、中に同じ事の重なりたる話も頗る多かつた茲には其異なる點のみを掲載する且其先輩者の氏名を一々記入するは、幾分其人の意志を窺知するの緒とする爲である。

●左様上達する近道と云ふて別に變つた手段もないが各自が一日の餘暇に將棋を研究なさる心なれば其餘暇の長し短かに依て或は定跡を調べる、或は古人の指將棋をさし試みる、或は一局の詰を研究するのにある、云は氣のぬけぬ様に日一日と研究するが上達の道である。

名人 小野 五平氏談

●含みのある手を賞美します、含みの中の含みと云ふ事があります、直に手ひどく當る手は面白く

ない、つらい、餘りに却つて敵に考へ込まれ反對に勢を増さしむる種になる、ボーヤリとした手に妙味があつて、今はコタへぬと思ふも末に必ず利のあるものです。

六段 箕 太七郎氏談

●進む手あり、退く手あり、餘く強く指すも悪し弱きも見苦し、一進一退の呼吸が大事である。

六段 勝浦松之助氏談

この呼吸が即ち將棋の秘訣である、定跡を調ふる際は勿論、古人の指將棋に就ても自分なれば、この銀はかく進むに、何故に古人は退いて居るか、この金は自分なれば退くに何故に古人は進めて居るか、この桂は少し早過る様に思はるゝが何故に今打つか、何故にとび上るか其一進一退に注意して調ふれば必ず其遲速の妙を覺りうるのである、定跡を調ふる古人の指將棋をさし試みるの要はこの點の研究に重きを置かねばならぬ。

●左様、稽古將棋をさしたる時に中程に及んで指手に苦心する場合は一局に必ず有るものです其際には十分に苦心して負けても手数が多い手数を執るのが稽古の本意であります初心は兎角、ボット目にうつた處を指すもので一通りの考へては必ず失敗が多い謂は思案も趣向も淺薄で二三手で跡が續かないのです、上手方は多くの手数を考へて指さるゝ方には一倍骨の折れるもので上手方の苦心する處は下手方に取つて其駒働きの妙味並に複雑なる手数を覺える事になります。

七段 阪田三吉氏談

●詰將棋を試みる時に度々駒を動かすは頗る悪い其詰むと定まつた手数をよみきるのが、詰將棋の眼目である云は實戰に於し指手の手数をよみきる稽古をするのであら、實戰に於て駒を置き直す事を許さぬ限りは其手数をよみきる頭腦を平素に養成せねばならぬ即ち駒を動かさず手数をよみ切つて詰めるのが其練習である、又一方實戰に於て盤面も次第に狭くなりて、この模様なれば詰か若くは必至のあるものと思念すれば、必ず詰のあるものと断定して其手数をよみ、ドーシテも詰がなければ必至の手数をよみきつて見るのであるこゝが勝敗の分け目であらう。

三段 高濱 禎氏談

其手数をよみきると、いふは容易の事でない、平素詰將棋、必至に就て深く練磨の功を積むのが肝心である。



故人 天野宗歩大人傳授

將棋駒組秘訣

名人に駒組なしと古より謂へるは悉く末を知て敵の虚實を謀り虚あれば則ち其所に進む、進む内にも内を圍ふ故に外實にして虚なく駒自由に働くなり。

上手は悉く末を知ると難し只當然を以て駒組の法を調ふに勿論自由に働くと雖も末に差間あること多し、修行にあらざれば末まで知りがたし然れども其變を知ると早くして駒を組換ゆるなり。

下手は駒組の法を知らざる故駒不自由なり況んや變に向ふ時は是を知らざる故急に組換ゆるとも成り難く、彌々不自由に成り差間多し之に依て未熟の爲めに駒組定法其變を記す。

駒組大法

- (第一) 王早く肩突くべし
- (第二) 王角の筋用捨すべし
- (第三) 王の脇金銀は成るべからず

欠

欠

らしむるの意なり。

《言格るたれは現に書古》

- (一) 名人に駒組なしと古人は云へり、悉く末を知りて敵の虚實を謀り、虚あれば則其所に進む進む内にも内を圍ふ故に外實にして虚なく駒は自由に働くなり。
- (二) 上手と雖も悉く末をしる事難し、唯當然を以て駒組の法を整ふる事論なく、然らざれば末に差支へる事多し修業にあれば末迄は知り難し然れども其邊を知りて駒を繰換ゆる事を知るべし。
- (三) 下手は駒組の法を知らざる故に駒不自由なり況んや變に向ふ時は是を知らざるが故に急に組替る事なり難く駒愈不自由となり差支へ多し依て未熟のため駒組の定法を識す。

將棋の段位

下圖に掲示せるは初段以上の駒落の力を示せし者に於て九段を名人とし八段を半名人とし以下是に順して見るべし。

將棋段位駒落之圖

							九段 名人
						平交車手	八段 半名人
				香車	同上	同上	七段 上手
			角交車行	同上	同上	同上	六段 上手間手
		角行	同上	同上	同上	同上	五段 上手並
	飛車	同上	同上	同上	同上	同上	四段 強片馬
	定車	同上	同上	同上	同上	同上	三段 並片馬
角交車行	同上	同上	同上	同上	同上	同上	二段
香飛車	同上	同上	同上	同上	同上	同上	初段

六 枚 落 (通俗金銀と云ふ)

◎沿革 六枚落の指方は古流にては福島萬兵衛、新流にては天野宗歩、渡瀬庄司の著述書に見へその駒組少なからずされど大の要意に過ぎぬ。

◎演義 六枚落の下手方必勝法は居飛車にて角筋を開きて攻むる指方、角を運用して飛車の居住を端に振替えて指すの二道に歸着する(王)を始めより圍ふは下手方に得なく端の痛みを指す

は四枚落の定跡は下手方の必勝法にして特に居飛車の指方優れて良しく紛れ少なし。

(圖解) 四金四歩八銀四角八銀四歩四歩四歩五歩五歩七金六歩 同 香六金二飛 甲一五歩六角 同 歩八角 乙五銀五飛

第一圖 (落 枚 六)

星	将	歩	香	王	香		将
					歩		
香	香	香	香		香		香
				香		香	
	香						香
	馬				歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩		銀	
	銀						馬
			金	王			

乙五 三角四銀六角 ナル八 五金

六枚落は第一に角筋を敵の兩端に利用し其破れ安き方より上手方の駒組十分ならざるに乗じ敏捷に端より崩す事肝要なり本圖の如き四角上り一二飛を逃し兩將の銳氣を以て攻むる手段尤もよし又一六の香車直に敵陣へ進入し成れば手後になりて惡し故に一二飛を廻らし素早くして二六角金と塵殺し一八香なりて遂に上手方防備の術盡き施す手段なし五三角は打場なくして下手方の目を眩まさんどすれども四二銀と上り角を引かし八五金と打ち角は身體逃るに途なし己を防守し敵を攻むる應手大に注目すべき處なり亦指方を替へ初學練習の資に供す。

變化 甲(一五歩の處) 三銀七香 ナル一 五歩六角 丙同 歩七金八銀五飛八五八飛 ナル五 六金

如斯變化すると雖も下手方は寸隙なく突進し六二金の上りは角の打込を防ぐ手段深慮の策大に佳すべし尙變化あり。

變化 丙(同歩の處) 同 銀七金五銀五飛四銀八飛 ナル五 三金

如斯銀の上る時は尙一層追撃の好機會を得しなり何となれば王將の守備隊を減し不安の位置に乗じ攻め立る手段尤もよし尙第一着の原圖に變化あり。

變化 乙(五三角の處) 六五七飛 ナル四 六銀二金

如斯變化するとも下手方よし後手は金を以て攻る手段を取るべし尤手前に角の打場あり注意すべし

◎五枚落 俗に片桂馬と云ふ

五枚落の指方は第壹章六枚落の指方及次に掲ぐる兩桂の定跡を習得して其活用の手段を試みるゝが尤良るし、今假に上手方が左の桂を除きて指すとすれば下手方は第壹篇第壹章六枚落居飛車の定跡にて指すべく、上手方が右の桂を取つて指すとすれば第壹篇第貳章六枚落の定跡にて攻むるも妙或は第貳篇兩桂の指方を其桂のある方に指試みるも一層妙ならん。

第 二 枚 落 (左 桂 除 落)

桂		金	王	金	銀	桂	皇
飛							
	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
皇	歩	歩					
		銀	歩	歩	歩	歩	歩
			玉				
					金	銀	桂

(圖解) 七九八金四歩八銀五歩六歩七金七銀七銀七銀 甲六八王五歩同歩六歩同歩五銀八八銀同金同香

本圖の五枚落(左桂除)凡て駒落は其弱點の方に進撃すべきは將棋の要點にして斯如左桂除きたれば其除きたる方九筋を繰出し攻め立つべし九五迄歩を突き更に八筋則ち飛車先の歩を突き銀を一步々々敵陣に進は思慮大に面白し七四銀上るに至りて一戦にして敵を破る實に妙と謂ふべし始め九筋を突き止め八六の歩に轉じ然して八五歩を突き直に銀にて提らず九六歩は某局の秘訣とする處にして意味大に注目すべし駒組の準備整はざる内に攻むるを專一とし己が王將を繰出し金を以て守備する杯は劣手と心得べし尙變化あり左に掲ぐ。

變化 甲(六八王の處) 五三三歩六歩八歩七金六歩 乙同 銀四歩 丙七右八 五歩五銀 同 銀同歩六歩 同 金 左六八五七角 ナル同 王六金 打

如斯 五八金と指せし時三四歩と角筋を利す其局に臨み臨機應變の手段肝要にして八六歩を取り銀上りし時六四歩と攻口を轉し銀の歸路を廻り八五歩尤妙なり又八六歩と金先へ突捨て八六角は實に英敏なる手段にして如何にも施す術なし又變化あり。

變化 乙(同銀の處) 同金六歩 同歩五銀 同 金 飛六歩 飛八銀六香 如斯 指ても下手方良し。

變化 丙(七七金右の處) 五六歩 同 角六金三角五歩四角六歩六歩八玉二飛七金五歩五銀 同 歩七銀 同 七五銀 同 王五金七王五金八銀六金八王六金 如斯 變化しても下手方應戰面白く妙手紛々たり大に良し。

四 枚 落 通俗兩柱と云ふ

●沿革 兩柱の定跡は天野宗歩の著述書「最廣く行はれてゐるが然し古流の筑前源右衛門、福島萬兵衛の定跡も面白く又更に渡瀬庄司の記録に遺れるもの優れて面白し。

●演義 六枚落に同じく居飛車の指方と角を運用し端に飛を廻りて攻むる指方の二つに過ぎぬ。

●定説 六段勝浦松之助曰 四枚落の力にて下手方定跡を學ばずして指せば上手方に金銀若くは玉を繰上る餘裕を興えて紛れ多く不利なり木見五段の説の如く六枚落四枚落の定跡は即ち下手方の必勝法なれば篤と修養せらるべし殊に渡瀬六段居飛車の定跡紛れ少く尙且高濱三段の増補に依て完成せられたりと思ふ。

○四枚落定石規箴

我國將棋の行はるゝや久しと雖も四枚落、六枚落等の定石を考案し出せし人は唯だ天野宗歩大人あるのみ、大人の創見に據て四枚落、六枚落の將棋定石漸くに世に行はるゝに至りしが故に其之に關して古來名人上手の垂範箴一も未だあらざるは固より其當さに然るべき所なり。然りと雖も余の見る所を以てせば、四枚落の定石は大抵二枚落將棋の駒立に指せるもの、如し唯だ尋

常二枚落の將棋駒立に比較して違ふ所は其指方の細かきと荒きとの別あるに過ぎず、語を換て云へば二枚落の駒立には下手方の指方細かく指し四枚落の駒立には下手方の指方荒く指せるもの、如し然らば則ち四枚落には二枚落を指す心持にて大抵可なるに似たれども、自から其内に指方を細かくすると荒くするとの別なくんば 第五 右 三枚 除 圖 五

- (圖解) 八金四歩 八銀四角 六歩四步
- 四歩四歩 八玉 三角 八金 五歩七金
- 二歩 乙五 六歩六歩 同 香 六金 二飛
- 四歩 六歩 六歩 同 香 六金 二飛
- 一歩 八香 ナル 七銀 二飛 五歩 同
- 四歩 五歩 五金 二角 三歩 ナル 會 桂
- 一四 三金 三飛 七金 二銀 六歩 四飛

皇	將	將	香	王	香			將	
					香				將
香	香	香	香		香		香	步	金
						香		香	
				步	步				
步	步	步	步		金	銀	步		皇
			玉						
	桂	銀							

此局は前圖の變化にして右柱を除きたり左右何れを除きても手段同一に見ゆれども然らず角行を繰出し縦横に利用し攻むる事肝要なるべし三七金上りし時二四歩の突出しは妙なり又一二へ香進入して二

二へ飛車を寄せ金先を攻め一五金の上り時四二角透間なき手段なり飛車三二へ寄せ二二銀の上り防備手順大に良し遂に三四飛にて金は身體の束縛せられて敗を請るの他なし又上手方三五歩八一角筋を止め一五金の上り手筋なり如斯形勢になりては下手方至極善し變化あり左に顯す。

變化 甲(五三二角の處) 一歩三三歩 同 香六金二飛五歩六角 同 歩八香 七銀五飛
 斯如 六枚落同様の崩し方もあれども上手方四八銀の引にて左に桂ある故五枚落の力にては下手方面白からず深慮すべし。

變化 乙(五六歩の處) 二歩二飛七金五金 同 飛 丙二歩 同 角 同 金 同 飛 丁三二飛
 如斯變化しても下手方良し此末二八金か二六歩打かの二手の内何にても良し。

變化 丙(二六歩の處) 三歩 同 角七金七角 ナル二 同 馬 同 金 同 飛七銀九飛 ナル三 二歩 打
 又變化 丁(三七角の處) 三歩 同 角七金七角 ナル二 同 馬 同 金 同 飛七銀九飛 ナル三 二歩 打
 又變化 戊(七八王の處) 七銀九飛 八王九金八銀九龍七角八金 已同 王九銀八王八龍
 又變化 己(同王の處) 同 金九銀六歩八銀 同 王七龍八金八金 同 金七龍
 右何れにても下手方よし斯如神變なる變化練習せば全勝に期せざるはなし

(圖解) 四銀九歩 八金五歩 八歩一歩 三金一歩 二歩八歩 八金一歩 同 歩 香七歩 同 香 ナル同 桂六歩 五桂七歩 ナル三
 二銀八王四歩 七金四歩 五歩五歩 同 歩 五桂六金七桂 ナル

四枚落は左右に桂あるを以て一方より攻むるを不可とす圖の如く一筋九筋の兩端の歩を突き通し何れにても上手方の寸隙に乗じ手段を施すを四枚落の秘訣とす如斯一筋の上手方駒組十分ならざるを思慮し歩を突きて戦略始まり香を捨て桂を上らせ而して桂先に直に歩を打に及びて一方の攻口の目的を達し徐に銀を上り桂を捕獲して七五へ打手段大に佳なり金若し八八へ下れば飛車先の歩を突き攻戦すべし此末九筋の歩を突き出して敏捷に打撃すべし又變化あり左に掲ぐ。

第四圖 (落枚四)

皇	将	将	王	将	皇
	銀			銀	
		金	金		
	歩			歩	
		金			
	歩	歩	歩	歩	金
			玉		銀
	桂	銀			

變化 甲(二五桂の) 九香七歩 ナル同 香三歩八銀五歩 同歩 飛八歩四飛 乙七歩二桂七金五桂
 如斯變化しても下手方良し二四へ飛車の透しりは此變化の要點たり。

變化 乙(七六歩の處) 七金八歩 同 金五桂六金七桂七金四歩

此變化にて八八歩と打三五桂大に面白し金の上りを防禦せしなり此次に一五八歩を突て良し。
 以上の定跡を新定跡と謂ひ天野宗歩の發明にして實に初學者の階梯なり次に三枚落の指方もあれども
 手段二枚落に近き者ゆへ記載する時は初心に紛らはしきに依りて略す總て二枚落の心組にて指す内に
 始終香落の方に注目すべし上手方にては二枚落と違ひ自然香だけの弱味ありて指悪き者なり碁局に臨
 みては一進一退駒の駆引に注意し縦横變化其妙を盡すべし。

兩駒落 又二枚落とも云ふ

●沿革 二枚落の駒組は古代より行はれ武田亦市、福島萬兵衛、大橋宗英、福島順記、宮城佐市、
 天野宗歩、渡瀬庄司などに由て逐次補修、改竄せられ各其特色が發揮せられてゐる。

●演義 二枚落の指方は飛車の活動を本位として、居飛車、三筋飛車、四筋飛車、中飛車、左の三
 筋飛車の變化あり亦市の好んで指せしを亦市組と名け宗英の補修せしものを三歩突きり(六筋七筋、
 八筋の三歩を突立て、指す型なれば略稱して三歩突きりと云ふ)宗歩は四間飛車を詳説してゐる然も

庄司の金多傳銀多傳最珍らしく上手方の五五歩留は諸流に種々の指方あれども本篇第壹章に掲ぐる
 もの變化を盡せりと云ふを得べし……要するに二枚落は上手方常に角の頭を急にさし金又は銀を繰出
 し桂馬を運用して下手方の狼狽に乗するを目的とす由て下手方よく防ぎ機に應じ、變に臨み或は居飛
 車或は三間飛車四間飛車、或は中飛車若くは左の三筋に振替て守勢忽ち攻勢に轉じ勝敗の一變する事
 を深く考究せらるべし。

●定説 五段木見金次郎曰 下手方の四間飛車甚だ利ある指方なれども今日に於ては上手方も其受
 方駒線に十分の研究を積み中盤別れに下手方多くは紛らさるゝものとす去れば金多傳、銀多傳の定跡
 の方寧ろ受け難く、下手方が攻めずにチート耐ゆる所、殊に味ありて面白し……又下手方の駒組の整
 はざる光に上手方五五歩留に銀を伴ひ或は金を伴ひて紛らす手段を取る事がある而も古來の定跡本に
 其受方の講述なく下手方の苦しむを實戰に於て屢見受る由て本篇にはこの二ツを加えて二枚落定跡
 の完全を期す。

五段 早川龜次郎曰 五五歩留に金又は銀を伴ひ下手方を紛らすの手段は本篇に掲げらるゝ定跡を
 習得せられれば、紛れなく上手方遂に不利に終るべし……亦三歩突きりの定跡も斯く研鑽せられては
 上手方指す餘地なしと思ふ……要は唯だ其習得の完と完からざるに歸着する。

五五歩銀留

○上手方が定跡に組ませては指にくしと最初より奇謀に出で、五五歩突銀留に出る指方ありこれ従前の定跡本になきもの也。

防禦すること能はざる所以のものは即ち是れ上手方の初めより拔手あるに由るものなり、下手方は上手方の拔手あるに乗じて適當の駒立を爲せし服力は實に其非凡なることを見るに足れり。

然れども上手方の拔手あるもの、如く見ゆるものは必ずしも拔手ならず、下手方は之を侮りて疎放の動作あるべからず然らざれば簡勁峭峻の氣力と手段とを以て上手方は下手方を蹂躪せんと試むるに至るべし、故に下手方は周到遺す所なきの用意を以て上手方の拔手あるに乗じて彼を攻め以て彼れを破り彼れをして扞然反抗せしむる所なきを要するなり。

一枚落定石規箴

四金 同步此時上手より角打所なし下手方三桂の頭へ歩打つ手にて勝なり。
總して二枚落は歩を捨て金銀を遠ざくることを工夫すべし。

六歩の突、歩と取れば角道塞り始終指悪し何時にても六歩の突き大方角にて取るべし上手は飛角の道塞ぐ様に指す故能々考へ飛角の筋通る様に心掛くべし工夫せざれば後に大に差支ゆるなり能々味ふべし。

七歩 四金 同飛 八銀 打 如の如くに成れば桂香上手方にて取れば下手指し悪くし七歩打たず六銀上る手習なり能工夫すべし。

五銀 七歩 八歩 此の八歩は飛を八飛と廻はさん爲めなり若し飛の道塞げば四銀と上らん爲めなり。
落方王を右へ行は駒を組ん爲め計りなり、右七歩を突く味方金と銀と替る宜し。

七角の引き急ぐべし敵の王の片付に付込み歩の進み肝要なり味方王の圍ひを急ひでは必ず負となるなり工夫すべし、極意は落され方初の中味方王圍ひ急がず先角道盤面の四方残らず開き自由働く様にすれば自然と勝になるなり初め飛の仕掛をば急がぬ方宜し是れ極秘なり、又味方の角道を皆な開いて後ち飛仕掛は二の筋と八筋と仕掛敵是れを請る時駒片寄るものなり此の時七か三かの筋より歩を取り替へて三の末の歩打つて勝なり。

色々手ありと雖も飛角落は初五四歩を切は悪なり。
敵の模様を見隙を伺ひ味方の右六三へ銀を入れ替る様にすること肝要扱敵よりは八五銀上るときは四四を突く手あるなり。

- (圖解)
- 四銀 三歩 五歩 六歩 八金 右六 五歩 七金 四歩 六金 二飛 五七 七銀 八金 三銀 六六 四銀 五金 五
 - 五銀 上 四銀 二歩 七三 四金 六歩 五歩 七歩 同 金二飛 甲 五七 七銀 六歩 八金 四歩 五歩 五銀 六歩 乙 五歩 同 銀 四歩 六銀 一歩
 - 七銀 上 四銀 二歩 七三 四金 六歩 五歩 七歩 同 金二飛 甲 五七 七銀 六歩 八金 四歩 五歩 五銀 六歩 乙 五歩 同 銀 四歩 六銀 一歩
 - 四二 歩

左に關する二枚落の指方は下手方駒組を卑くして應戦するを可とす若し高く金銀を繰出しては紛れを求め悪しと知るべし如斯六筋の歩を突出し六二へ飛を廻し銀を先鋒とし七筋を突詰て角筋の活用を以て攻め寄する手段大に良し尤も上手方金を繰出し二筋を突出せし時は七筋の歩突き立てる事肝要なり五五歩と角筋を止し時七筋へ飛車の廻しは素早くして尤も良し終に上手方は術に究し後手に困難せん角直に成らずして二四歩は用慎にして至極良し又變化あり左に掲ぐ。

第五圖 (落枚二)

皇	将			王		将	皇
		銀	銀	銀	銀	銀	
歩	歩			歩	金	歩	
			歩		銀		
		歩		歩			
歩	歩		歩		歩		歩
		金		玉			
香	桂					桂	香

此變化下手方大に良く此末八五桂か五五銀二手の内何れにても良く全勝の形勢顯たり。

又變化 甲(五六銀の處) 七歩 六歩 上手五玉操 五歩突

桂五歩六歩 八金二香 五金四銀

又變化 乙(五五歩の處) 四歩 九角 ナル同 金九馬

又變化 丙(七八金の處) 四歩 同 歩三歩一角八金三桂五金三金四歩 同 歩四玉四歩六金三銀五歩 同 歩銀五桂 同 四歩

又變化 丁(二五金の處) 四歩 同 歩五歩三銀五金五歩八王六歩

如斯種々變化するとも下手方大に善し能變化を練習すべし。

飛香落 通俗一ちやう半

●沿革 飛香落は段割最初の飛駒なれば古代より其駒組甚だ多く遺り其變化亦復雜なるも定跡と名命しては福島萬兵衛、筑前源右衛門、大橋宗英、福島順記、宮城佐市、大橋宗慶、天野宗歩、渡瀬庄司の著書に見へ、田中順理が其門弟に教へし定跡最新らしきものとす。

●演義 飛香落は下手方に香の痛みを指すを主眼とし、端飛廻り、居飛車引角、九三の歩立、四間飛車の變化にして、上手方の七七角留、七七歩留、八七金留等其駒組に由て下手方も駒組も變化を來たすものとす。

●定説 飛香落の定跡は何れを最も優れりとなすや、に就て一定の説示なしと雖ども本篇各章々下の初に掲ぐる高段棋士の説明を了知せられれば自から識別し得らるべし。

○飛香車落定石規箴

總して飛香車落は角替ては上手の方悪し、と知るべし下手の方より八角と打つてもよし併し香車にて理あり。

七角と上らず指すこと上手の方角替るを嫌ひてなり七角上る然る時は三角引に及ばず六歩六歩八歩同歩と突き飛車にて端の歩を取廻し四飛と引ば四飛と歸る事定跡なり後に五桂にて良し。

此將棋上手の方より飛先へ金銀を上り請ることあり尤も止るなり下手より是を破らんとすれば負るものなり上手へ飛先強く請けさせ弱き方へ飛を廻し破るべし。

此駒組は上手より三金と上りたる指方なり下手方六歩 歩同飛と突替り八歩打心得あるべし。

一飛の引面白し總て端を指すときは此指方宜し歩二つあれば最初四飛と行かず五歩 歩四歩と打へし歩切れ故此の如くに成るなり能く工夫すべし。

上手の方より飛先へ金銀を上り請 事尤も止まるなり下手より是を破らんとすれば負るものなり、上手へ飛先強く受けさせ弱方へ飛を廻し破るべし。

伊藤看書骨て曰く飛香落に向ふには即ち二枚落の對手心持なるべしと此説一理あり、然るに保原加茂左衛門の云ふ所に依れば飛香落には三筋引角にて向ふこと最も利あり是れも亦た一理あるに似たり

然らば則ち此二説を折衷して以て其場合の宜しきに投ずることを

(圖解) 七歩三歩八金二銀八銀 甲 二王八金二王二角 同 銀七銀三銀八銀二金六歩四歩七銀四歩八王三金六歩四歩

一歩五歩八金三銀 四銀四歩五歩
同歩 銀五歩 乙二歩八歩 同歩五歩
同歩 飛五歩二歩六銀二飛

下手方七二の銀運行するに意を注ぐと肝要也

此飛香落は端の歩を突き出し後

歩を打込むを此局の秘訣とす又

下手方角の交換を求め上手方は

換へじと防ぐもあれども本圖は

上手方より角の交換を求むる指

方なり下手方は其求に應じても

敢て差支へなし相方手段平穩に

出ると雖も上手方は駒の力足ざ

る故に飛車先を突き立てられ終に敗るに至る此末五五角の打て何れにても防がざる方へ成るべし尤も角を敵に渡せし時は角を打べき寸隙なき事を注意すべし又變化あり左に掲ぐ。

第六 飛香落 一其圖

皇	将		王	將	将	皇
進		將		王	將	
		将	将	将	将	将
		将		將		
						步
			步	步	步	步
	步		銀		步	步
	步	角	金		銀	王
	将				金	桂
						香

變化 乙(二六歩の處)四銀二金六歩四銀 如斯指ても下手方勝なり此末七四歩と突き出してよし
 又變化 甲(四二王の處)九三三九二角 同 銀七銀四歩 丙八金五歩八王二三金八銀一王六歩二金七銀四歩四銀

六銀六歩四歩 丁三歩 同歩 同銀
 八歩 同歩 同歩 飛六銀六歩
 六歩 同歩 同歩 飛六銀六歩
 七歩 八歩 同歩 飛 六銀二飛
 五歩 二飛 五歩 同歩 飛 六銀二飛
 八歩 九歩 同歩 九歩 同歩 金四角
 五歩 六歩 同歩 二歩 同歩 金四角

又變化 丙(八八金の處) 八五
 二金八銀一王六歩六歩 同歩 同香
 七歩 同香 九歩 同桂 如斯
 七歩 同香 九歩 同桂 如斯
 變化しても下手方よし此末

第七 飛香落其二

皇	飛			香		飛	皇
	飛				王		
		香	香	香	香	香	香
				香	香		
香		歩			銀		歩
			銀			歩	
歩	香		歩	歩	歩		
		金		玉		金	
		桂					桂

六四角の打あり又五八玉の
 時に下手より九六歩の仕掛
 あれども飛香落の力にては
 悪し又上手八八金と寄ぬ内は如斯九六歩の仕掛ある故八五歩は見合すべし手段能く心得べし又
 變化左に記す。

上手角換り
 五王操

變化 丁(三三五歩の處)二歩七歩三銀七桂四歩 此變化は上手方手詰りにて下手には七三桂又は銀

又は三金など手段多くありて位尤もよし。

此定跡角換よりの指方は上手三五歩と換り二三の筋又は端より烈しく仕掛る趣向なり因て下手は駒組
 低く操り三五銀の離れを咎めて指す意味大に注目すべし又櫓組の指方もあれども如斯手段紛れなく
 して下手方大によし。

又變化 戊(七六銀の處)七角二飛八歩七銀九角 已七銀七角九歩 同歩七歩 同桂六香 如斯指しても下
 手方よし。

又變化 己(七七銀の處)七八金なれば八八歩又九八金なれば四四角なりてよし此指方上手甚だ指にく
 し大に練習し記憶すべし。

飛車落

●沿革 飛落は六段違ひの落駒なれば古來より其指方に苦心の跡著しく角落とは二段の相違なれ
 ども夫程の違ひなりと思へず初進者には飛落の方寧ろ指にくしと云ふ方をも見受る……近代天野宗歩
 は四間腰かけ銀の定跡を詳述してゐるが今日に於ては上手方の調べも十分に行届きて初進には四間
 飛車にて指せば紛れ多く古流の居飛車引角の指方を勧むる者もあり……古流の居飛車引角は福島順記

に由り大橋宗英に依り亦更に宮城佐市に頼り補修せられてある。

●演義 斯く云ふ四間慶かけ銀若くは居飛車引角の他に名村立摩の棋傳鈔に掲げられたる二枚金及渡瀬庄司の左三間飛車の指方は稀に見る型にして頗る下手方に紛れ少く利あるものとす……凡そ飛落は上手方角の取換りを嫌ふを本旨として定跡の著はされあるは飛香落に同じ而かも時に奇謀に出て上手方初めより角を取換りて指す事もある、多くは利なきものなれども下手方非力にては紛らさるゝもの也。

○飛車落定石規箴

上手より敵の王先を急に指さば六歩と突き高櫓に組むべし雁木は上手の方色々手あり飛車落は四筋吉と心得べきなり。
四歩 同 桂 同 桂二銀と引く手あるなり夫故五銀と取るなり總て飛車落角行落等には此類多し能々考へ指すべし。
四歩の時七歩打たず六歩と上手打手あり力無くては下手方指悪し。
五銀 打 四角六六銀八金九銀 同 王七金 打 下手方宜し但し此駒組は力ある人考へ指すべし此指方上手の好まざる義なり。

八王習なき故悪し、飛車落すときは四八の王苦しからす苟にも角落には四八の玉と限るは習事なり。飛車落には四八の王良し。

八六の歩悪し、急がの事なり先七王と退き其後二八の王と片付べきなり。

三五の歩は取て又打が良し王の近き所破れぬ様にすべし勝負は此處にあり。

五金よりは三銀なる五銀 同 角 銀五の金と指すこと宜し。

五桂行ば悪し打ば勝になるなり二王三銀一王三桂成て勝なり斯様の所の桂飛べば手前の罪あるものなり桂一枚捨て、置けば罪遠きものなり所に依るべし。

飛車落駒立櫓に構ふは五八金とありて其端に手なき故金の離れを見合せんが爲めなり。

四筋の飛車落ば四五歩突くこと大抵宜しきものなり、又其落し方より五三銀上らずして二三角引き六

五銀の手あれば是れ定跡あるが故に落され方は之を受るに能く考へて迂濶の手を施すべからすと古人

福島順基は云へり。

五四歩四八飛三三金三六歩の指順にて三三桂を落し方上らざるときは四五に歩あり總して八一飛六八

角三一角四六歩の順に指し行かば落され方は必ず勝つべし。

(圖解) 六歩四歩六歩四歩八金二銀八銀三銀七銀四銀六歩二飛七桂四歩八玉二金 右 八王二王八銀三桂八金二銀
六歩四歩七銀四歩六銀三銀七金二王六歩四歩九角五歩 同 銀 同 角 五桂 同 桂 六金三角 甲乙 四角五桂 丙 五銀

七銀九金六銀 同 金七桂ナル 同 銀六角

如斯 飛車落も六筋へ廻し角筋を利し銀の上り定法なり上手の玉片付ん否やに必ず下手は五二金上り防備し如斯 機會に乘じ六五の

歩三三桂の繰出しありて大に良し又五五桂は角筋を止め敵に當るの手段大に面白し上手方全力を盡して攻守する時は尋常の手段にては破れず大に策略を繞らし應戦六六角と金を採りて終に防ぐ事を得ず又變化あり左に記す。

第八圖 (落車飛)

皇				王		皇
			飛	王		
	飛		飛	飛	飛	飛
飛		飛		飛		
			飛			
歩		歩		角		歩
	歩		銀	歩	歩	玉
香	金				桂	香

變化 甲(四六角の處) 五金 上手持留七角
 同 飛 同 歩九角 ナル八角 同 馬 同 金 引落シ
 四香九桂五五五銀六角
 又變化 乙(四六角の處) 五歩四銀四角三桂五歩五銀 同 金 同 桂五銀四角 同 銀九角 ナル

如斯 何れも下手方善し乙の變化此末四四香の手あると知るべし。

變化 丙(五八銀の處) 五五五桂 ナル同 角五角六銀 三角四角四銀 打
 如斯 變化しても下手方良し此未下手より五五金の打あり駒の方則意の如くにして大によし。

角 落

●沿革 角落の定跡は飛落に等しく古代より十分に指盡され殊に伊藤家三代目宗看に依りて全く完成せられ銀双冠、金双冠と名くる定跡は宗看の名を傳へたるものなりと謂はるゝ如く宗看の好んで指せし型にして其後幾多の名人上手に頼りて補修改竄せられ變化も詳述せられ殆んど全く盡きたるやを疑はしむ而して棋道の變化無限なれば更に終極を認めず唯定跡の命名に於てのみ他の落駒に比ぶれば單調の觀ありき。

●今日に於て行はるゝ定跡を總括するに角落の定跡は下手方向飛車若くは左の三間飛車にして玉の圍を本組と名くるもの……下手方居飛車、玉櫓圍ひのもの……三間四間飛車にて下手方より早仕懸けに出るもの……三に過ぎぬ。

●演義 角落は古流にては専ら櫓圍ひ、居飛車を唱賛する傾向がある、又實際下手方の玉を櫓に取居飛車にて指さば下手方に紛れうすく有利である、左は謂ふものゝ始めより櫓に組ますして上手方

の駒線を注意し、上手が玉を右に繰れば本組の指方よろしく五七銀と繰れば櫓に組むがよろし、要するに初めの一手く歩の突出し模様によて種々の指方あるは各章々下に注意を拂ふて研鑽せらるべし
 或者は二枚の定跡亦治組の指方を角落に利用するものあり又或者は好んで袖飛車を指す者をも見受け
 る要は定跡の活用手段に他ならず。

○角行落定跡規箴

三桂の時三飛廻る手もあり總て角落は釣合大切なるものなり下手の方より指す心あらば負なり上手の方より指す所を大切に受て負べし古語に曰く角行落は勝つことなく負なきことなりと味ある哉。
 二金上らず五歩の突の時七銀と上り右の如く指すべし大分意味深きことなり能々考ふべし。
 總じて角行落は釣合大切なるものなり上手方中央までは釣合す其末は手詰になりて自然と負になるものなり其考ひなく飛の方より年に仕掛て負になること多し能々考ふべし。
 七の角上手に斯様の荒手を仕掛能き事稀なり習無き故大に無理なり。
 駒組上りてから習には五歩 同 桂六歩 七桂 同 金と取るなり習なれども五桂の打ある故に五六歩善し此所に此手は入らざれども習ひ事故に記すものなり二歩くごし此當りは不出來なり是は三香の裏を恐るゝと見へたり。

八三王の上り習ひ事なり。

八八の歩 同 飛七九の銀打手は是れ上手の作所下手の成らぬ事なり。
 八四の金は六五歩を突かせて角 下手方五四歩突くよし
 を出さぬ爲なり。

七の桂上り難き事なり然れども
 是は敵若し五の歩と突かば 同歩
 同 香 同 金と取らん時四五の
 桂と躍ねん爲なり。
 角落にて仕掛來るを受るに落方
 飛の方へ金を離る時に必く王
 の方六七の筋及八九の筋より破
 る手出來るなり、味能く角を遣
 ひ破りても勝になるなり但し本

第九圖 角行落 (一其)

皇	将	王	香	桂	皇
	進	香		馬	
香	香		香	香	香
		香			
	香				
		歩	歩	歩	歩
歩	歩	銀		歩	歩
	銀	王		飛	
香	桂	金	金	桂	香

下手方櫓早掛り

五七の銀上り手強みあり
 方 櫓掛の駒立能なり初歩を突來る時も大切なり尤も歩を取て請寄り手前に打は悪なり、歩を打は
 駒の働きを失ひ歩一ツの様なり初歩を手に持ては駒の働き格別宜きなり先への仕掛自由成るものなり

(圖解) 八銀四步六步五二銀四步四步八金 左四 三銀六步四步四金 三飛五步三角六金二角五步二金 左四 同 銀 甲
 四三銀 同 步 乙四三金 四五銀 三金七銀 四金 同 同 金 八飛 五步

凡そ角落は上手の飛車先の防禦する深慮肝要なり故に下手は二筋或は三筋へ廻り角を四筋又は六筋へ環轉し相互に意味を通じ戦略を廻すべし三筋四筋五筋の歩は上手より突けば相應して突くべし上手四五へ歩突し時直に取らずして五二金上り良し一時形勢を張と雖も金の上り早くして敵を打撃して形勢を一變し動かざる確き局面を顯す大に良し

第十圖 角行落 (二其)

皇	将	濱		王	零		将	皇
					馬	進		
糸	糸	糸	糸				糸	糸
				糸	零			
					糸	糸	步	
				步				步
步	步	步	步	銀		步		
					飛			
香	桂			玉	金	銀	桂	香

又四四歩の處三八金なれば四五歩の取り三三桂の上り凡て下手方良し。變化 甲(四五歩の處)三金四歩 同 歩 金五歩 如斯變化しても下手方良し又三八金の處五七銀な

れば三五歩四六金四五歩にて下手方位置極良し。

變化 乙(四四歩の處)三金四歩 同 歩 八金四飛九王三桂八銀二王八王二王七金四角五歩 同 歩 六金六金 丙 同 金 同 歩 四金七歩

同 銀六歩 如斯 にも 下手方此未寄なり注意すべし。

變化 丙(同金の處)四打四金 同 銀六歩 同 角 銀八金 如斯指しても下手方良し勿論上手角一枚にて歩され故此未寄にて良し。

○左香車落定跡規箴

下手より飛繼ぎなき内に四の歩突くべからず。

三五の歩大きに善き手なり。

敵の飛車先明けて退くこと如何と云へば宗桂曰く是安と利知義に指して勝つこと堅し逆に依て六の角なり。

四香習ふ事なり遅早と云ふ事なり金引く九時諸人皆四九に歩打つ前に云ふ通り是安手前に歩打事は大事と申されし意は是にて見へたり。

五五の歩上手の爲ぬ事なり。

四三の歩は遅早と申して是に達したる手は稀なる由なり。

四 銀行く手妙なり。
 飛を引はゆどりのゆきえとて上手の嫌ふ事なり。
 五 銀上るは好手なり。
 六 金の離れ程の負なり此金を七に置きたらば能くあるべし七の歩も六と有り度よし、上手の咄なりき。
 上手の方より八八角打つ手あり尤も香と角と突くと雖も角働きなき故角打手悪し。
 七七桂八六歩八五歩七九角八六飛九七角成るの順にて指すは下手方大いに利あり古來此指手を鳥さしと稱す。

第十圖
 (一其) 落車香左

皇	将			香	王	将	皇
			香	香	香	香	
		香	香	香	香	香	
皇							香
香	香	歩					歩
			歩	歩			
歩	歩	角			歩	歩	歩
飛			銀	金		王	
	桂				金	銀	桂

六八角引

○右香落定跡規箴

一 歩七桂と指すは奇謀なり落されの方より急に端を透すこと悪し駒組整ひて後自然と味有るべし。
 香落は平手の心にて善し上手より四歩又は七桂早く上ること成りがたし自然と香落の傷みある故なり
 下手方より手を指すべからず。
 二 五角の時六飛と引く手良し一體此指方下手の方四歩の取り面白からず矢張八飛と引く手良し上手と争う形ありて損なり能々味ふべし。
 五歩の時六飛と上る事常なり七桂上るは奇謀なり六歩より仕掛させん爲めなり、左に記す此謀を知り六歩を突かず駒組整るときは自然に香の弱みありて香落の方指悪し。
 七歩 成同 銀二香 此駒組は初心の爲め香の働を記す右香落は平手の心善しと云ふも此將棋の事なり。
 三 金大に嫌ふことなり假令二金にて勝たんよりも是を二金として負けよと申されける兎角將の班なるを上手衆は嫌ふとなり。
 香落の方へ總駒の強みを仕掛ては破りても王將の方弱くなる故急に負するものなり先大將を圍ひたる事善し此將棋を香落の手本とするなり。
 先飛車を行へき所にて二銀上る事悪し先飛車を行其後二銀上りたる善し。

三代目の宗桂の曰石田流には七金と上りて使ふなりと。
 二銀を三銀と打べき様に何れも不審なれども二四の歩成されば仕掛薄き故三銀銀と歩の頭に打申事は是れ上手の所作なり。

前にも記す如く香落方へ強く仕掛破りても徳ある事なし香の頭へ飛をさがり勝事未だなし堅くすべからず。

總じて香落の將棋の大事とは殊に習ひ事なり香落の方へ左のみかまはず何れ其時に飛か角かを成り遙の徳あるなり、又香下の方も歩を突き捨て遙に歩を打つ様なる事許を徳にすれば勝有り

無理に破り將棋に勝つことなし能く考へて見るべきものなり。
 手前に歩を打は一大事なり駒なくてすべき様なくば格別なり幸金の繋と云ひ將棋は勝なり故に銀打な

圖二十第 (二其) 落香左

龍									

上手六銀留

六三角の時諸人八二飛と寄るべきに七一の飛は習事なりと宗桂物語れり。
 七八金大きに悪し八飛の如く香落方へ強く責て破りても明けて退く故に急に弱味あり。
 是安の曰二金とある駒組に終に勝つことを見ず二金にて負なり
 金は大将の方へ參て良し是安是れを嫌ひ申さるゝなり。

圖三十第 (一其) 落車香右

皇	将	將	王		將	将	皇

一六の歩を捨る事極めて敏捷

九金の手は甚だ妙なり石田檢校以仙此金の手色々評判あり後に皆々手を打て感じけるとなり。

左角の方の桂を上り働く様に向の敵の駒の當りを考へること多くあり甚だ妙なる所あり。

初め一通り指來り中頃に至りて八七歩一九角二六飛四六角四六飛と指すは即ち後手方先手方に三筋へ

塵と見せて居飛車の仕掛なるが

故に妙なり、此手の後六五歩を

突切りて角を替へ桂にて上るの

仕掛巧みなりと云ふべしと伊藤

宗桂は話されにき。

森田宗立は右香落を欺待ふに平

手の心持に指すこと可なれども

唯だ平手のみの心得なれば上手

方に早く備ひを堅めしむる餘裕

を興ふるに至るべければ下手方

は上手方の右端より崩しかる

べなるものとす。

圖 四十 第 (二其) 落香車右

皇	飛	馬	王		飛	皇
	飛		香	香	飛	
香		香	香	香	香	
				留	香	
			步			
		步	銀		步	步
步	步		步	步	桂	飛
	銀	金				又
香	桂		玉	金		

(圖解) 六歩四歩六歩四歩八歩七歩八歩七歩七角二王八飛三王四王二銀三王九角六銀九角五歩八金 左五右一六歩四歩七銀四歩

七銀六歩 同 九歩 同 香 甲九歩 同 香 ナル 同 桂九歩 九飛八歩 乙同 角六角五桂 同 飛九飛八角 ナル 七銀九歩 △同角
六銀五歩 同 六歩 七歩 香 甲七歩 同 香 ナル 同 桂九歩 八飛六歩 乙同 角六角五桂 同 飛九飛八角 ナル 七銀九歩 △同角
同 飛 同 七馬 九飛 ナル 七歩 六歩 五歩 八銀 一龍 六歩 六歩 八香 五角 打

凡て香車落は平手の手段を持ち其の弱點に附込み進撃すべし勿論全力を盡しては破ると雖王將の備へ
空虚になりては大に悪し本圖の如く先づ金銀を以て確く王を防禦し而して攻むるを可とす九筋と飛車
先の歩を並びて突又敢て争はず遠く六筋の歩を除に突出し角筋を利用し銀を上らせ初めて九六歩と戦
の緒を開く尤も注目すべき處とす又九五と飛車の頭に歩を打ち角を交換は直に取らずして大に面白し六
三步の時五一銀と引は良し此末三五桂と繰出し六七銀の打込を含み下手方大に良し又△同角の處八五
銀九六飛八二飛と指手もあれども其場合下手八七馬九五角五四馬の引にて下手方大に位よし。

又變化 甲(九七歩の處) 丙九八飛七銀七歩 五歩 八歩 二角 銀七桂六歩
又變化 乙(九四歩の處) 七銀七歩 九歩 九飛 八歩 九歩 同 香 ナル 同 飛九歩 八飛 八飛 八飛 六香 五飛 一香
六歩 打 如斯何れに變化しても下手方良し。

變化 乙(同角の處) 同 歩 二飛 五桂 四飛 九香 七歩 ナル 同 飛 同 飛 同 飛 同 香 七飛 九角 七飛 ナル
如斯變化しても下手方善し此末は下手より六七香の意味あり心得べし。

(圖解) 六歩四歩六歩四歩八歩七歩八歩七歩七角二王八飛三王四王二銀三王九角六銀九角五歩八金 左五右一六歩四歩七銀四歩
五五 六歩 四歩 六歩 四歩 八歩 七歩 八歩 七歩 七角 二王 八飛 三王 四王 二銀 三王 九角 六銀 九角 五歩 八金 左五右一六歩 四歩 七銀 四歩
六歩 二金 九王 四歩 六歩 五歩 七銀 六歩 同 歩 八歩 乙五 一歩 ナル 三 七桂 七角 七飛 四角 六銀 八と

香車落は前に説明する如く端の仕掛肝要なり本圖は相掛りは最初に早く角を交換し手前は駒を低く組上げ上手方の十分に駒の準備整頓せざる内に端より仕掛るべし如圖駒組は妙手として敢て説明する處なし以上述る如く大に注意して應戦すべし變化あり左に掲ぐ。

變化 甲(二二銀の處)六銀七歩 丙四銀七歩 五銀四歩 三銀七歩 ナル同 銀四角二金六飛

如斯 下手方二銀二銀 と上る手順大に良し併し十分の駒操ゆへ上手より八六飛の廻りにて下手方

指にくし大に注意すべし。

變化 丙(四二銀の處)丁五銀四角三銀二銀七銀 如斯 變化しては下手歩損なれども角を持上手は

角を盤面に置ある故位は互角なれども下手方此指方好まず上手方良しとす。

又變化 丁(五四歩の處)二銀九王四歩六歩七銀六歩 同歩八歩六角八飛 如斯 下手方變化すれば大に指

良し此末三三銀四一王四四銀と上り角の頭を指べし尤も本文は最初に角を替り二二銀五二金と操

直に端よりの仕掛なれども如斯 六二銀と上り指手甚良し上手より七五歩の突なき時は直に四二

銀 故甚善し能く注意すべし。

變化 五歩の處)六角二銀七銀一王九王三銀八王四歩六歩四銀 如斯 變化下手方良し歩一枚損なれ

ども上手は角を打下手は手に角ある故端の仕掛の手多くあり上手は角の引より外に手なし其時三

五歩の突出しにて下手よし。

平手

演義

●演義 手方の多数は居飛車を指してゐる、稀には角筋を留めて後手方の指口を伺ふ場合もある、總じて古來より得ありと唱へ、先手方は先居飛車に定めてゐる……居飛車を指す時は飛車の先の歩の掛り桂立桂先の歩つき六筋七筋の歩の突出し模様時に五四五六の歩とに由て大に留意し飛車の脇の銀は豫備で後手方の指模様によりて七筋若くは五筋に浮出するのである。

後手方は受方にて角道を止め 指口が多い故に先手方の駒の運びに細心注意して大事を取り四間飛車とも向飛車とも若くは中飛車とも、袖飛車とも敵に悟られぬ様に金銀の繰出し模様を大事と心がくべし、玉を早く圍ひては四間、三間、向飛車より受方なく其外は銀を繰出して後にはじめて中飛車模様となる、謂ば飛車の活動領域が狭くなる、由て最初の中の駒繰模様は頗る大事である、……先手が玉のみを早く繰れば袖飛車を指す銀を早く繰れば四間飛車にて受留るなど、先手の指手順を注意して指すのが肝心で始めより無意味に袖飛車、中飛車など、極めて指すのは初進者のする事にして悪し。

○平手定跡規箴

三王五左 二王九金と指すこと 是亦習事なり先の方より九金の時五歩突くべからず悪しきなり先方より敵八金

と指さば五歩突くもありと知るべし此將棋受の方指悪し四歩と突くときは受の方より手ありと知るべし四歩十分に指しては受の方位負なり後手の方より五歩突かば六歩突く手あり先にて五歩を突かば石田の意なり早く八銀考ふべし。

五桂躍ねんとならば二銀上り後三歩なり三銀と取れば飛車繁々故に善し又八角引くとき三角五歩五歩八歩寄る手もあり考ふべし。

後手の方より四歩突かす七銀二銀と指す時は歩持ちたると持たざるに徳あり。美濃には六歩突くべし後角の白眼にて六桂の打あり先の方も敵美濃圍と見るならば四銀定跡と知るべし。

六歩四歩と行くときは六歩惜むべからず總て石田の受駒上り殊に大切なり石田よりも敷に此の如く組すれば位負なり初手の内に手の出る様に指すべし。

後手の方より七桂と上る時五歩 突くは本書の手あり突くべからず五歩突く時分あり見合せ突くべし定跡なり四歩突捨る時四銀定跡なり相櫓に好みては組まぬものなり。

初めに角替六五に打つこと上手の爲す手なり角筋悪しき故大きに嫌ふ角は何方に打ても五五の歸る様に考ふべし。

先の方より敵に角を換へさする様に指すべし五歩突くは三銀下に定跡なり又市組は端に手ありと知る

べし總して端の傷みに敵の歩切を見て端へ掛るべし又敵歩ありとも端傷むることあり失れも外に能手あらば見合せ請の方も多く端より破るゝなり受仕掛共に端の歩専要なり尤も五五に妙手ありと考て能々味ふべし。

四歩の時 歩取ること悪し八金と上るべし。

二歩は五六手早し大將を心の儘に退きてから後仕掛るなり是を是安流と云ふなり。

後手の方より袖飛と指す時は早く角引換へ指すべし。

先の方も敵七銀早く上り八金と突かば袖飛車と心得三銀と受て指すべし。

第五十圖

一其(間四車飛居)手平

星	将		香		将	星
	王	歩		飛	歩	
香	香	香	香		香	香
				香	香	
						歩
		歩		歩		歩
歩	歩	角	歩		歩	
		王		金	銀	飛
香	桂	銀	金			桂

四八銀上り方よし

先手方角の上り方注意して可なり
七銀上らず七角二金八角三金七銀二王 此の如くに指すは先手方合櫓を嫌ふてなり七角の上り面白し。
四歩八王五歩 飛 同 桂 如此に指すときは四歩の突悪し七桂上らず八王と退くときは四歩の突

きよし。
 六歩の打先手の方面白し五歩三銀と引ば後に五歩の突ありて先手宜しからず總て當らずに指すべし、
 六歩の打含み深し能々味ふべし。
 四歩の時桂七金と上るべし歩突き換へ桂に歩打べし五に仕掛ある故良し。
 五角と打せ五角面白し双方共駒の上り大事なり能々考ふべし。
 二金八王の手先手の方悪し三金と上る時は強く此方へ指込手段なり八七の寄悪し八飛と寄り請へし都て此の様の手段程々有り油断すべからず一手一心付指事肝要なり。
 裏四間請は多川五一組にて請る但し四八飛と廻る時に四二銀上り請けるなり尤も宗桂八五桂を躍ねず
 に六五歩突くなり多川は若し八五桂を躍ねば八八角引く六五歩ならば五五歩 同 角の時八六歩なるべし
 能考ふべし五七銀は悪しかるべし。
 駒組調上に敵仕掛を見合せて王の脇へ金銀を上り見合せの時は四歩を切て見合せ宜し表四間は一金寄
 宜し表四間請は一金は終りの勝なり七銀五桂八角五歩八金と指すは秘する處なり。

1612

(圖解) 七歩三歩二歩四歩二歩三歩四歩三歩五歩四歩五歩六歩七歩八歩九歩
 同角同飛三歩八飛一王八王二王八王二銀七銀三銀六歩
 此指方先手方飛車先歩切にて手に持つと雖も後手方指手に苦しむ四五歩を突けば先手方は四六歩を突くべし又六四銀上る時は六五歩と銀の頭へ突くべし故に先手方良しとす又變化あり左に掲ぐ。
 變化 甲(二三銀の處)三桂七金
 四歩六歩同歩同銀五歩七銀
 四銀八金スア七七同歩四七
 四銀八金スア七七同歩四七

第六十圖
 (跡定手平)
 櫓相

皇	桂					桂	皇
	飛				王		
			飛	王	飛		
飛		飛	王	飛			飛
	飛						
歩		歩	歩	歩			歩
	歩	銀	金	銀	歩		
		玉	金			飛	
香	桂					桂	香

如斯變しても先手方良し尤も相櫓は双方同格の手段なりと雖も先手は仕掛によりて勝を占ひべし先づ角を換て後寸隙を見て打込む策を秘談とす大に注意して指すべし。

速成上達新式將棋講義

(圖解) 七歩三二四歩四歩五歩三角四銀八銀二銀五歩五歩八金 右四飛六王六王七王八王九王三歩四歩六歩二王七角三銀
 六歩四歩五歩 左四歩六歩 甲三歩 乙同歩 丙四歩四銀四歩同歩四歩 丁同歩 金三角同桂 丙二飛三歩八飛五歩
 此指方先手方仕掛懸し位互角なり然し四五の歩は良し若し同歩と後手指せば角を交換られ悪しき故なり先手三五の歩は好まず指方次に示す又五五の歩は大に意味ありと知べし變化左に掲ぐ

變化 甲(三五歩の處) 七桂三金
 四歩同銀四歩同歩五歩三銀三角
 ナル同桂七角五桂同桂飛一角
 ナル同銀 乙(四六歩の處) 三角四飛六歩八銀九角 ナル二飛 ナル三桂 七香七桂五飛七銀七飛 四歩七歩 ナル同桂 七角 七銀 四馬 七銀 四馬 七銀 四飛 六馬 四桂 六銀 七桂 ナル同銀

第十圖 平手定跡 四間居飛車

皇	将	零				皇
	王	將		遊		
	将	将		零	将	将
将		将	将		將	
				将	将	
歩		歩				歩
	歩		歩			
	角	王	金	銀	銀	飛
香	桂	銀	金			桂

如斯變化しては先手方大に指よし此後端よりの仕掛肝要なり四間居飛車には以上述る如く駒組崩し

方大に善し先手三五桂の飛びは宜し又四四を取らせ二四の歩もよし先手方銀と桂香との換りにて位良しとす又變化あり左に掲ぐ。
 變化 乙(四六歩の處) 三角四飛六歩八銀九角 ナル二飛 ナル三桂 七香七桂五飛七銀七飛 四歩七歩 ナル同桂 七角 七銀 四馬 七銀 四馬 七銀 四飛 六馬 四桂 六銀 七桂 ナル同銀

第十二圖 平手定跡 四間向飛車

皇	将	零				皇
	王	將		遊		
	将	将		零	将	将
将		将	将		將	
				将	将	
歩		歩				歩
	歩		歩			
	角	王	金	銀	銀	飛
香	桂	銀	金			桂

此局相互に四筋へ飛車を廻すを以て向飛車と云ふ後手方二六歩突くは奇謀と知べし尤も王を圍ふは大に稱美すべきなれども先手方如斯手間取る内後手より三七桂と上られ四筋の仕掛によりて先手は利を失して大に悪しと知るべし

勿論大局に於る手段は先手を取り實戦する事必要なり別て本文の如き兩將相對したる場合大切に手段を注目せずば一回術手後なる場合は大なる患を求むる者なり能々心得て指べし此駒組は先手方五三銀の上り後手方三七桂の上り相方大切なり勿論如斯形勢になりては後手方駒組よし又變化あり左に記載す。

變化 甲(二二角引かず) 四歩 五桂二角四歩五歩同角四歩 如斯變化しても後手方よし手後れになる場合は如何はど手術を深慮するとも其効なし大に欽むべし。

圖一十二第 △
跡定手平
車飛向

皇						昇	皇
	王	零	馬	海		並	
	卒	卒	卒	海		卒	
卒		卒			歩	銀	卒
			卒	卒			歩
歩		歩		歩		歩	歩
角	歩		銀		桂		
		玉	金	金			
香	桂			飛			香

(圖解) 六歩三歩四歩五歩三角 八銀二銀六歩五歩八金三銀 八王二銀八王三銀八銀二飛六歩 二王六歩七歩九歩七桂二金 左六歩六歩四歩五歩六歩七歩八歩 四歩同銀九飛 甲六歩五歩同歩五銀五歩七角三銀四歩二銀四銀

如斯後手方二二へ飛を回し向飛車に組む時は先手方二筋の仕掛を止め四五歩の突き肝要の手筋にし

て四筋より手段を求む大によし又後手方四四へ銀上りし時先手四五へ銀を突當て後手五五へ角筋を止めし時九七角は素早くして甚だ面白し後手は終に防ぐ能はずして勢力を先手方に譲らざるを得ず又變化あり左に記す。

變化 甲(六二角の處) 四飛六歩 同歩五銀二角四銀 銀四歩同飛 二銀二飛三銀 ナル同金二金打 如斯變化しても先手方よし前に記する如く四五の歩と突き角筋を利用し攻むれば如斯手段を施すとも更に其効なし五三歩大によし五二の金も又妙なり此後寄りにて勝なり。

圖二十二第
跡定手平
車飛居兩

皇						零	昇	皇
		角		零		王		
		卒		卒		海	卒	
卒	並	卒	卒		卒		卒	卒
				海			歩	
歩		歩	歩	卒	歩	歩		歩
	歩	桂	銀	銀				
	王	金		金			飛	
香							桂	香

(圖解) 四歩七歩八歩六歩八歩七角 二銀八銀七歩五歩六歩七銀二王 八銀三王七銀二銀六歩三銀 右七五 右六九 九王四歩九歩一歩二歩 八金二金 九王四歩九歩一歩二歩 三銀五歩四銀 右四三 一角五歩八歩同角同角 飛七歩四飛九王 四歩八王 七桂七桂五歩同歩銀 甲七五歩同銀 銀七歩六金 右五九 同歩五歩同桂 同桂 銀三桂六銀六歩 同金五角

七飛七五七引八五桂七金 六歩七銀七同 金 同 桂 同 飛七同 飛八金九飛七五金
 此駒組後手の方始めは前局に記したる袖飛車の組方なりと雖も中途より先手方手段變化せしより大に入亂れたる活面白き變化を知らしめんが爲なり本文六六歩同桂同桂同銀のとき七三桂と打こと大に
 良し後に八五に出づるも妙なり此駒組は後手方七七桂と上るは桂の頭薄き故悪しと知るべし總じて桂は活用は至極妙を顯すと雖も要をなさるる場合は歩にも劣れり凡て飛ぶことは注意すべし。
 又變化あり左に記載す。

變化 甲(七二角の處) 六歩四銀 引二飛五五六金 右ヨル七五九同歩 乙九九香七銀九飛六銀八歩 ナル
 大五桂四角七桂 ナル同 金六歩

變化 乙(九七歩の處) 同 王四飛五歩 同歩八王六歩 同銀 右七五七歩 ナル同 金 右八飛
 如斯なりて先手力桂一枚徳ありて良し此形勢にては後手方八八王悪し六九王に置き指方宜しとす。

(第二十三圖)

(圖解) 七歩三歩二歩四歩四銀三銀五五歩三歩四歩六歩二飛八王(七五七五八金 右五 左五 同歩 甲同 角二玉八角
 二銀五歩三銀七桂七歩二歩 同歩 桂二角三歩一角三桂 ナル

凡て美濃圍の駒組は双方同じく王を片付向飛車又は四間飛車各其局面の配置に依り手段あり既に盤局の如き其例にして先手方五五歩を突き後手の模様を詢り二筋の歩の突き提敏にして其活用の絶妙なる終に後手は二三歩を打れて如何にも施す術なくなりぬ實に將棋の要點とする此處にあり迂遠の策に不非唯一歩の應用如何によりて輸贏此一舉に定む大に研究すべき妙技と謂ふべし又變化左に示す。

變化 甲(五五角の處) 四銀五歩 三角七角二王七銀二銀八銀四歩 五銀三金七桂四歩六歩四歩六歩 四歩六歩三桂六飛四歩
 如斯變化相方互角にして未だ如何とも論じ難し併し駒組は少し先手方可ならん臨機應變奇略大に深慮すべし總て其機會を失すれば指にくくなる者なれば注意肝要たるべし。

第二十二圖 美濃圍 平手定跡

香	桂	銀	金	銀	飛	香
王	王	王	王	王	王	王
香	香	香	香	香	香	香
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
角	玉	金	銀	飛	香	香

(第二十四圖) 圖解) 七歩三歩二歩八歩二歩八歩七三金二金二歩 同歩 飛八歩 同歩 飛二歩 飛二歩八歩四飛六王 四王八銀二銀五歩 五歩三歩九歩一歩五歩五歩八金四歩七桂三桂五歩 同歩 五歩 同歩 三歩 同歩 金五香 香五桂二金三歩 桂 同歩 桂 同歩 桂 同歩

同 金三 桂一 角三 三角 角二 三角 九角 八角 八銀 八馬 二龍

右相掛りは近時好まざる定跡と雖も中古盛に流行せし者なれば考の爲に顯す先手方端崩し至極妙なり一五歩を捨て一五香にて歩を取るは損の形なれども歩切の場合合は多く此手段を應用するなり

大に心得べきなり直に桂を繰出し二三歩の打込にて遂に主意を貫徹し飛車先を瓦解せし又九九角の成込は此形勢にて八八銀にて通路切斷して好まぬ手段なし大に注意すべし此指方先手方面白し又變化あり左に記す。

變化 甲(一一角の處)四桂二桂

ナル同 銀五飛四歩五飛三飛五飛

如斯變化双方手段あり大に面白し能く活用を注目し應戦すべし。

圖四十二第

跡定手平 相掛り

皇				王	馬	車	香
			馬	香			
		車	車	車	香		
車	馬	車	車				
						香	
歩						飛	
						桂	
	歩			歩	桂		
					銀		
香	桂	銀	玉	金			

257

(圖解) 七歩三歩二歩四歩二歩三歩四銀二銀六歩三銀六歩四歩五歩六歩八王六銀七王五銀八銀二飛七銀二王七角

七王八金 右五 左一 六歩四歩三銀八王五歩一角四歩 同 銀三歩四銀六歩二金四歩五歩四歩六歩三金 右六 七金 七歩八王四歩

八金三桂六歩三王七王二角四歩 同 銀三銀五歩 同 桂六銀五歩

五七 同 銀六銀五歩 同 桂六銀五歩

圖五十二第

跡定手平 雁木

皇	車					車	皇
		王	香				
	車	車	車	車	車	車	
車							
						歩	
歩		歩		歩	歩		歩
	歩	銀	歩	歩	銀		
		玉		金		飛	
香	桂	角	金			桂	香

此雁木の駒組は未は櫓となり飛車落の駒組にも尤も善しとす如斯雁木は確くして容易に破れ難し此局を拆くには美濃圍を最とす深遠なる策大に注目すべし本圖は勝敗未だ分解せず此場合互角なり尤も王先歩の突合て高く組むは十分注意すべし一手空手を打ば瓦解る勝敗此處一舉にあると知るべし。

261

(圖解) 七三 七五 甲六 六六 六八 七六 八四 五三 四二 七二 九六 四七 七五 七三 五銀 八銀 四步 七角 二金
 六步 四步 七銀 四步 八金 左七 二八 三金 八銀 四步 六步 三桂 乙五 八銀 同桂 同步 四金 五步 同步 同香

此局の石田組は昔時石田檢校始めて工夫せし定跡ゆへ石田組といふ後大阪にては三好宗無といふ名人指したる故又宗無流とも云ふ併し此定跡は近時は好まざる駒組にも七筋へ飛車を廻し七六へ上り九七へ角を廻し七三に桂で七筋六筋を進撃する趣向なり後手方は普通の指方にては破れ難し八三金上り九三の桂の飛び大に働きあり手段にして如斯

第二十六圖
 平手定跡
 石田組

香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香
香	桂	王	銀	金	角	步	飛	步	香

應手せずば指にくしと心得べし先手方に於ては崩し方の指手を知らざれば宜しとすと雖も常に好まざる駒組なり猶石田組は中途にて美濃圍ひに組替る事あり大に注意すべし乙五六銀の處八六歩七二飛と

指しては此場合先手方よし又變化あり左に記す。

- 變化 甲(六二銀の處) 三五 八飛 三飛 四歩 同歩 飛 六歩 同歩 八角 ナル同 銀 五角 七角 九角 ナル一角 ナル 七香 五香 四香 二香 ナル同 銀 八銀 三桂 七桂 八飛

如斯 後手方面白き手段にして實に機敏なり先手を有し且香の得ありて後手方よし。

詰手の定位

詰手とは對局し戦闘入亂し勝敗一舉に迫るを謂ふ其奇變も場合に於ては敗を轉じて勝に期す等其例枚擧するに違あらず凡て如斯 手段其深淵なる堂奥に達せずば靈妙の方術何處に存するや豫知しがたし初心者の手段は概ね一手より一手と敵に迫り終に其機會を失し反て堅陣にならしめ始めて己が劣手を悟るに至る杯實に笑ふに絶へたる手段多し故に詰手の必要を知るべし其方術千變萬化際限なし豈尋常の手段ならんや或は策略を巡らし又は激烈なる手段を施す等凡て方略の優劣に存するなれば豫め胸算し敏活なる攻激をすべし本卷皆名人の作せる其妙を撰み單説を以て練習の便に供す最初に記する定跡と此詰手を學び胸中に其用を熟讀し記憶せば龍に翼を添ゆるに等しく其奧秘を極め妙域に至らん。

詰手には左に掲ぐる三綱の方則を深く遵守すべし。

第一 駒は一步たりとも狼に捨るを禁じ大に慎むべきは勿論なれども其場合に臨み豫め目算して其方

略定まる時は駒を惜まず敏捷の手段を以て終結の勝利を履行すべし然し捨場大切なりと知るべし。
 第二 詰手に臨みては手数少なきを尊び尤も敵に適切なる手段を廻すべし其機會に際し一手より一手迂遠の策を成すべからず手段を遠慮し見込十分に定まりたる時は速に行ふべし但し王の逃場は考慮すべし輕忽に應手すべからず大に得策あるべし。
 第三 成りて良き場合あり又成らずして良き場合あり或時は敵の駒をして反て敵を制するの策あり能く注意して冗手を指すべからず。

詰手之圖 其 一

王										

飛金銀

(圖解) 一飛打二飛同二金打同玉
 三銀打三二金打同飛同銀同玉三飛打四玉四飛五玉四飛六玉四飛七玉四飛八玉四飛七玉三飛ナルスア六玉

三龍二玉三龍一玉三飛ナルス一玉一龍二玉二龍引一玉三龍一玉二龍

此局面玉一枚を飛金銀にて詰めるなり面白き圖にて飛車の活用を示すなり起手飛車の打場尤も肝要にして一三飛は其當を得たる云ふべし二飛の間は他の駒にては速に詰む故大は良し又二二金と玉を上らせ三三銀は三二へ打ても同一の手段なれども位に於て大に良し玉は一三へ上りては二四金にて詰み一へ下れば二二金にて詰む故に三一へ引くなり三二金と打ち此處にて一二飛の合間の効力あり又三三飛と王の頭に直に打ずして三四と一間を隔て打は妙なり兩飛の筋を利し相應じて敵玉を追撃し合駒を用ゆる違あらず終に捕獲せらる局中二三飛二二金の手段は大に注目すべき處なり。

詰手之圖 其 二

皇	飛		王	飛	皇
	龍			龍	
飛	飛	飛		飛	飛
	留			留	

桂桂香

詰手 (其三)

(圖解) 五香同馬 右四桂 同馬 三桂 同馬 六桂

此詰方は桂桂香三枚に詰るなり四三桂六三桂何れへ打ても飛の筋にて玉は上る得ず直に詰むが如く見ゆれど成角兩筋に利きにて打ことを得ず初心者は先づ五筋の手前又五三杯香を打と雖も平凡の手段にして詰まず斯の如き詰手は大に思慮を要すべき者にして圖解に記する如く五四香と打ち馬に取らせるなり尤も右の馬にて取らば四三桂と打ち左の馬にて取らば六三桂と打ち兩筋に利しを一方に臨ませるなり四三馬の時は六三桂と打ち六三馬の時は四三桂にて詰むなり此詰方は香の活用の有るなり其趣向實に感ずるの他なし若し馬にて取らずして玉の頭に間をすれば四三桂六三桂何れにても詰むなり深慮の策大に注目すべき處なり。

(圖解) 二金 同玉 四桂 同金 六飛 二金 二金 三王 三飛 同玉 二角 二王 四銀 三玉 四銀 ナル 六玉 二金 同玉 三角 ナル 一玉 一歩 一玉 二歩 同玉 三金 同桂 四玉 一王 一歩 同玉 二桂 ナル 六玉 二馬 二玉 二馬

本圖は敵玉の傍に金を控へ右に銀飛車前面に歩の列にて寸隙だになし又己が駒として局面一物もなし此詰方は實に妙と謂ざるを得ず左の説明を大に注目せられよ詰方は飛車の利用如何にあるなり二二金と玉の頭に打ち三四桂と金に取らずは玉の傍に金のある場合は手段尤も困難なり故に其障害物を避けしめ六二飛は凡に非ず三三桂は大に善し若し一二の金を取らば三二へ飛車なりて直に詰むなり此時三二飛は方略の巧なる轉瞬の機を失せず二一角と打ち次て四三銀にて外面へ出るを防ぎ且挫く大略主旨を貫徹せり六二玉の時五二拾を捨駒にし角を引き激烈なる攻路によつて堅固の方陣茲に破れ大勢遂に定まる豈通常の手段にして臨みを達するを得んや。

詰手之圖 其三

Shogi board diagram showing piece positions for the 'Three' variation. The board is 9x9. Pieces are placed as follows: Row 1: King (王) at 1-5, Silver (銀) at 1-4, Knight (馬) at 1-3, Pawn (歩) at 1-2. Row 2: Knight (馬) at 2-3, Silver (銀) at 2-4, Pawn (歩) at 2-2. Row 3: Knight (馬) at 3-3, Silver (銀) at 3-4, Pawn (歩) at 3-2. Row 4: Knight (馬) at 4-3, Silver (銀) at 4-4, Pawn (歩) at 4-2. Row 5: Knight (馬) at 5-3, Silver (銀) at 5-4, Pawn (歩) at 5-2. Row 6: Knight (馬) at 6-3, Silver (銀) at 6-4, Pawn (歩) at 6-2. Row 7: Knight (馬) at 7-3, Silver (銀) at 7-4, Pawn (歩) at 7-2. Row 8: Knight (馬) at 8-3, Silver (銀) at 8-4, Pawn (歩) at 8-2. Row 9: Knight (馬) at 9-3, Silver (銀) at 9-4, Pawn (歩) at 9-2.

(圖解) 三銀 同 龍 五香 同 龍 馬 三玉 二馬 同 角 五桂 二玉 一銀 ナラメ 同 玉 二銀 打 三玉 三桂 同 角 同 銀 同 玉 二角 四玉 五飛 二玉 三飛 ナル 四玉 一角 ナル 同 玉 三龍 二步 二銀

駒を棄て、利を計るは將棋の秘訣なりと雖も無益に捨つるは不可なり本圖の如きは手前より香を打ち間を求むる平凡の考慮は斯の如くならん然らずして三五銀は一舉敵に迫るの妙なり敵は取らずして一三へ下れば二五桂にて詣む龍にて取るに適當なり二五香にて龍を取り一三玉と下らしめ二四馬は強硬なる術千金の價値あり角に取らせ二五桂にて一二玉と一隅へ下らしめ二一銀同玉二二銀は隅に主旨を達せるを得ずして外面に出ず凡て方略に依ると知るべし三三桂にて角を取り四二角は通常は五一へ打を可とす此場合にて大に良し五三飛にて終に死地に陥り急迫して効を奏す三五銀二四馬の手段實に深慮の術と謂はざるを得ず。

詰手之圖 其 四

Shogi board diagram for the right page. Pieces are placed on a 9x9 grid. Labels include 香, 銀, 龍, 馬, 桂, 王, 飛, 歩, 角.

(圖解) 七同 王 七三 八五 六銀 四玉 八桂 同 龍 八銀 同 龍 六桂 同 龍 七角 同 龍 四金 七四とは角筋を利し敵玉を上らさる通常の手段なり七三角なり八五王と上らせ七四銀は道理なる手順なり九四王と下りし時八筋龍の鋭氣を避けしむるは此場合肝要たるべし豫じめ目算し輕忽に手を降すべからず八六桂同飛八五桂同飛八六桂同飛深く策を環せし方略にて七四角と指すに及びて取れば悪く又取らずして合駒をすれば八四金と打たれて詰む身體此處に究迫し又如何にとも施す術なし攻方若し一手冗手を指せば敵に一手の得を備へ終に目的を達するを得ず總て詰手は一手も手抜き出來難き者にして大に深謀を要すべき者と知るべし。

詰手之圖 其 五

Shogi board diagram for the left page. Pieces are placed on a 9x9 grid. Labels include 角, 龍, 桂, 王, 飛, 歩, 馬, 桂, 銀, 金.

(圖解) 七六桂一玉二銀 同 玉五馬 同 銀六桂一玉三桂 ナラス九一玉三桂 ナラス

駒は夫々活用に應じて妙を顯すと雖も桂は別して奇計あると知るべし本圖の桂四枚にて成らずして詰む又妙なり尤も駒の成不成に於ては終局の場合大に注目すべき處にして奇策此内に存するを知るべし本圖七四桂は大に良し王五二へ避けば六三銀四一玉三三桂三一玉二一馬にて直に詰むなり故に六一へ引く總て詰手に玉の退却は攻方の持駒及び局面の形勢を大に思慮し應手するは將棊の秘訣なり七二銀と打ち玉を上らせ五四馬は障害物を除く手段にて妙手と謂はざるを得ず以下桂の活用にて目的を達するに至れり。

詰手之圖 其六

銀桂桂

(圖解) 九銀 同 玉八桂 同 銀三金 同 歩 同 馬 同 玉二歩 ナラス 二玉七三龍 八玉八龍 二金 上七桂 九玉二歩 同 金一龍 九三銀にて玉を上らせ八五桂銀にて取らせ而して八三金と打ち一步を取りて馬を棄るは思ひ切たる手段にて苦心慘膽實に妙訣の方略にして若し一手を過れば堅陣となり容易く施す術なし七二歩成らずして透し玉手は妙なり若し歩なれば玉は九二へ避け九三歩にて詰むあれども歩詰は確く禁じたればなり七三桂成らずして龍を以て攻撃し七二歩を動かさず敵飛の利を切斷し八三龍を廻し金を上らせ七三桂九一玉九二歩同金一龍にて効を奏す凡て平易の圖は却て深意を存して妙手の活用なくば詰むべからざるを知了すべし本圖の如き持駒銀桂金と連續して方略を環らすは初學者の大に味ふべき處なり。

詰手之圖 其七

金銀桂

(圖解) 三角 ナル四 二玉二飛 打四 五飛 ナル三 四玉五金 同 銀四 龍四 合間五 銀

本圖は四一へ飛を打ちて攻め初むる通常の手段の如く見ゆるれど然らず先一三角となり込み敵の舉動を覗なり此時桂にて取るも又合間をするとも四一飛にて一舉に亡ぶ故に四二に其銳氣を避けたり此場合飛車の打場大に目算を要す五二へ打ば四三五にて後手に苦しむなり故に六二と一間隔て打ば多く局面に出る手段なり五二飛なり三四へ玉を上らしめ三五金を打て銀に取らし五四龍にて龍馬左右より相夾撃して敵王此處に於て究し動く餘地更になし。

詰手之圖

其 八

			王	群					
			零						
				手	手				
				手	手				
						角			
							步		

飛 金

(圖解) 四銀 同 金三飛 同 王二飛 ナル八 四玉五金 同 玉五龍 六玉七龍 七玉八金 八玉八龍 九玉八龍

此局五四銀と打しとき五二へ王行けば六二飛にて直に詰むなり故に同金と取る七三飛は敵地にて容易く詰まざるを豫め計り手段を外面に求むるなり七二飛なり玉を八四へ上らしめ七五金と打ば王は九五へ上り龍の通路を金にて遮断し面白からず故に九五金と打ちて玉に與へ七五龍を引く大によし終に九一へ王を迫撃し手段全く成就す一の冗手を指せば敵に一の利を與ふるなり首尾相救ひ前後相應じてこそ此道の手段と言ふべけれ。

詰手之圖

其 九

					手				
					飛				
			王		零				
		手	桂	手					
					手	又			

飛 金 金 銀

(圖解)

五馬 同 香二歩 一玉三桂 飛 同 ナラズ 一歩 ナル 同 飛 同 香 ナル 同 玉二歩 同 龍 同 玉二飛 同 玉四飛 一玉二歩 同 王 三桂 ナル 一玉二金

此局は面白き圖なり五筋の歩を馬に取れば香の利きあり一筋には飛龍にて香を交へ如何なる手段を求むる此處大に勝算すべき處なり手に一物の駒なし尤も兩邊のとは敵王に對し大切の駒なれば五五馬にて香を與へ二歩にて二一へ王を避けしめ一三桂の飛びにて飛に取らせ香車の活用の開路を得透さ二歩なり同飛同香同玉と飛を捕獲し尙一歩と王の頭らに打ち龍を取り一四飛は尤も其當を得たる打場にして若し金銀にて間をすれば一へ飛を打つべし。

詰手之圖 其十

				王
		星		
			星	
			留	香
				香
		香	桂	桂
			馬	
				進
				香
				龍

(圖解)

八角 ナル 同 玉九歩 ナル 九 一王八 同 玉八 同 ナラズ 九 一玉二歩 同 玉九 同 玉三歩 一玉一香 ナル 同 玉八 同 玉二歩 同 玉四桂 一玉二歩 ナル 同 玉七 同 玉二龍 三玉 二龍 四玉 五銀 同 玉五 同 玉八 同 龍

詰手には玉の逃場尤も肝要にして策略を巡らす事専務とす攻方は駒を惜まずして勝を取るは上手の所爲にして此局の如き八二へ馬を棄一三歩なる玉は本の九一へ下る八二を棄て八三香ならざるは詰手の秘訣なり九二歩同王九三歩は龍を動かさず馬の通路を押して一歩々々敵玉に迫る又妙なり九四桂を打ち玉八一へ下り九二歩をなり王に與へて七二龍と初めて龍の活用をなし大勢此處に於て定まる意味深淵なる大に注目すべき處なり。

詰手之圖 其十一

王	香	角							
香	香								
歩		龍	留						
			留						
銀									
		桂							
	香								
									歩

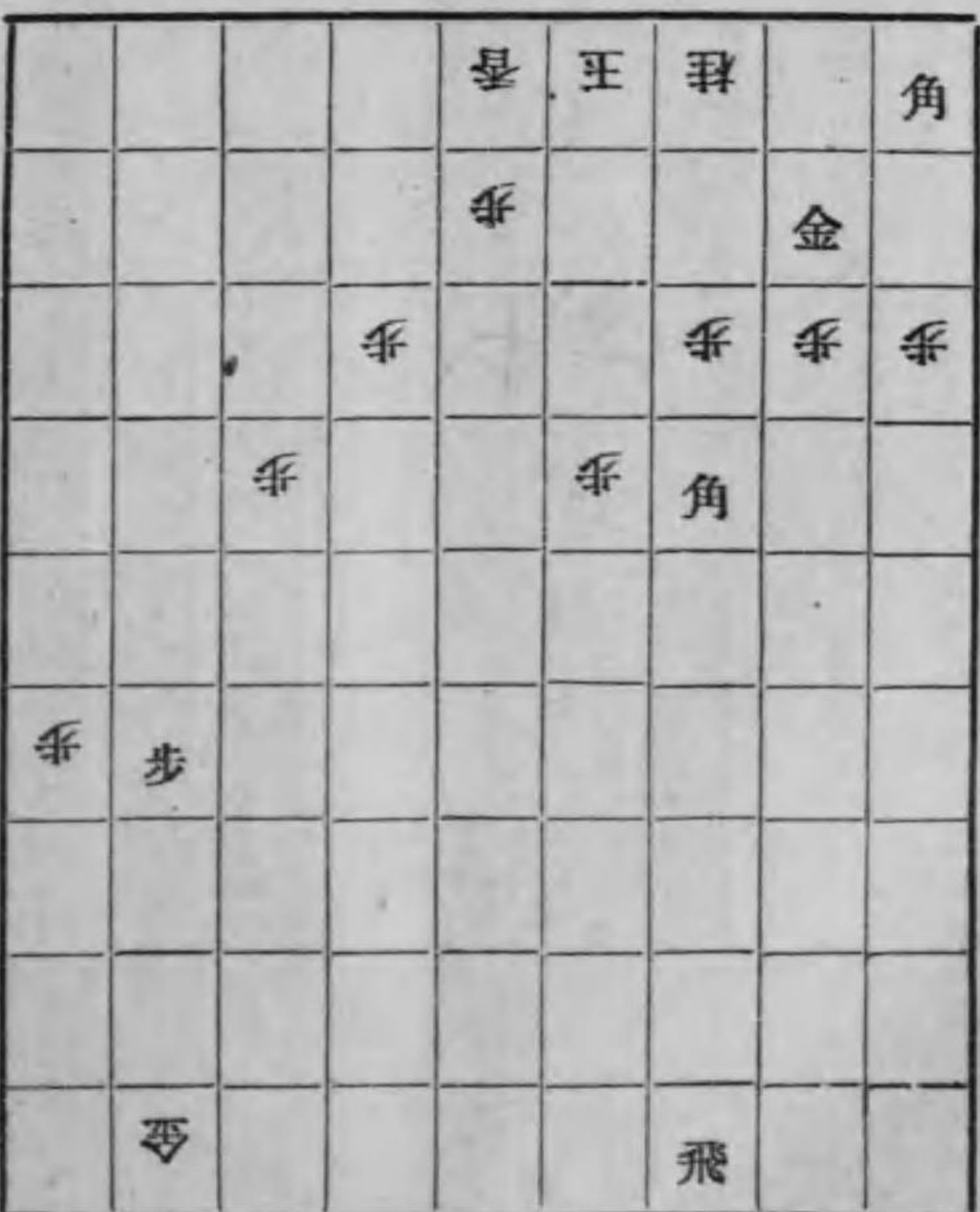
(圖解) 二金 同玉 四ナラズ 四一玉 二歩 同玉 三飛 ナル 五 五 四角 ナル 同玉 四龍 五玉 五龍 七玉 六龍 七玉 七龍 八玉 九歩 同玉

七龍

三二金と指し王に取らし四三角
ならざるは大に佳すべき方略な
り四一玉最も良し四二歩に王を
上らせ三三へ飛なり五三へ王を
避けしめ五四角のなりは敵玉を
塵殺する手段妙なり玉は六二へ
避くれば玉先の歩を馬にて取ら
れ速に詰む故同玉と上る其時龍
は角筋を利用し九八へ敏活なる
追撃を以てす此場合に於て七八
龍と指せば八八を合間に入れて
忽ち確陣なり又如何にも施す術なし故に九九歩と打ち王に取らせ九七龍を巡らし兩龍の働にて敵玉
は馬を防げば龍にて捕獲せられ龍を防げば馬にて捕獲せらる實に靈妙の詰方と謂はざるを得ず。

詰手之圖

其二十

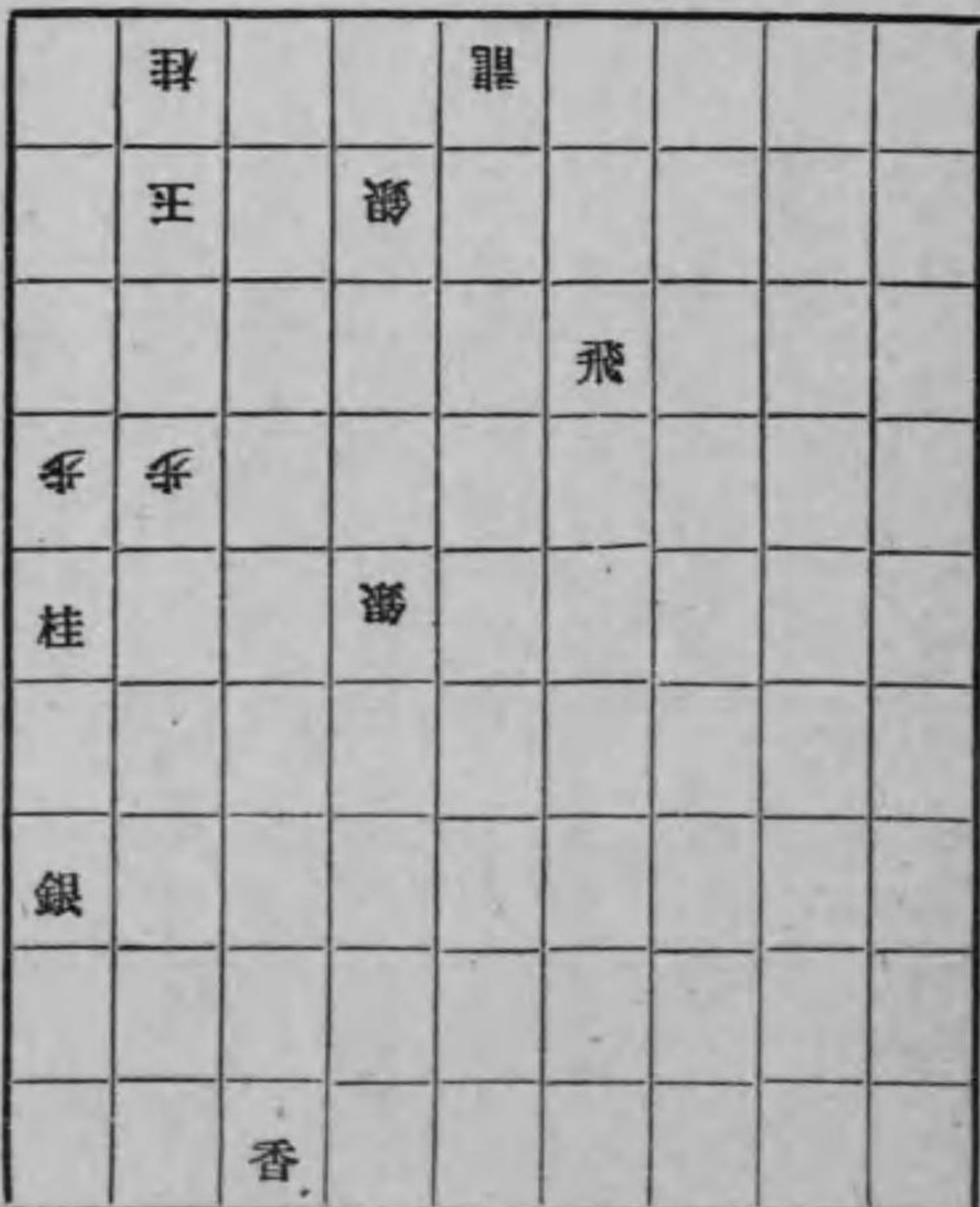


歩

(圖解) 四桂 同香 三角 ナラズ 三一玉 二歩 同玉 二飛 ナル 三 三 五 四 二 五 二 玉 六 銀 六 玉 五 龍 七 玉 二 銀 八 玉 八 龍 九 玉 八 龍
三四桂は大に良し王三一へ行けば速に詰む故に香にて取る三三三角ならずして攻撃は妙なり三一玉三
二歩同玉を取りし時一二飛とな
り大半瓦解し龍の活用の途開く
更に笑進して敵玉は益々苦難の
位地に臨み實に薄氷を踏む如く
又逃るに遑まらず終に縲洩の
耻を請く凡て初學者の詰手を案
するに深淵の思慮なく一手より
一手と追々に打つゆへに考の
行き止まりは概ね王の逃げ失せ
たる時なり大に慎むべきなり。

詰手之圖

其三十



歩歩歩歩

(圖解) 八歩九玉二歩同 玉三歩同 玉五桂同歩八歩ナレ同 玉八飛ナラズ九玉二歩同 玉八桂一玉三飛ナレ同 桂九歩八玉二歩ナレ

此居初心者は必ず飛車王先へ廻すか桂を成るかの二途を取るべし九一へ玉下れば歩詰にてなりて悪し輕忽にすべからざる手段なり先八歩を打て九一へ下らしめ九二歩同玉九三歩同玉と上らせ其時八二歩と指せば又本原になるなり九三へ玉を上らせしは八五桂を打たんが爲なり實に深慮の策略感嘆の他なし歩に取らせ八二歩にて玉に與へ飛を初めて八三に廻して九二へ玉を上らせ八四桂と要點とする主旨達する緒を成せり九三へ飛にて桂に與ふは玉の逃路を開かしめ九二歩八二香なりて終に勝を得茲に於て八五の桂萬釣の價値あり。

詰手之圖

其四十

Shogi board diagram for Diagram 40. Pieces: King (王) at 9-9, Rook (角) at 8-9, Knight (桂) at 8-8, Silver (銀) at 8-7, Horse (馬) at 8-6, Dragon (龍) at 7-7, Knight (桂) at 7-6, Silver (銀) at 7-5, Rook (角) at 7-4, Knight (桂) at 7-3, Silver (銀) at 7-2, Knight (桂) at 7-1, King (王) at 6-9, Knight (桂) at 6-8, Silver (銀) at 6-7, Knight (桂) at 6-6, Silver (銀) at 6-5, Knight (桂) at 6-4, Silver (銀) at 6-3, Knight (桂) at 6-2, King (王) at 6-1, Knight (桂) at 6-8, Silver (銀) at 6-7, Knight (桂) at 6-6, Silver (銀) at 6-5, Knight (桂) at 6-4, Silver (銀) at 6-3, Knight (桂) at 6-2, King (王) at 6-1.

金

(圖解) 二桂ナラズ同歩二金同 玉三角ナラズ一玉二歩二玉四龍三玉四金同 玉二龍五玉六龍同 玉五馬名將は籌略を千里の外に環らすと謂ふ此道に於て爾り況んや詰手に於て簡より繁に入り密より易に入る奇變計り難く随つて妙其中に存す本圖の如き二三桂を棄て一金捨駒にて玉に與へ二三角ならしめて一一へ玉を下らし一二歩を打ち二玉を避くるに及びて四二龍にて二三玉を上らすは尋常の手段に非ず大に注目すべき方略なり二四銀同玉二二龍にて三五玉と避く此時二五へ龍を引ば四六へ玉上り虎口を逃れて安全の地位に臨む故に二六へ龍を引き敵玉は進退に究し止を得ず同玉と取る二五馬にて詰む餌を投じて利を占む意味深く遵守すべし

詰手之圖

其五十

Shogi board diagram for Diagram 50. Pieces: Knight (桂) at 9-9, King (王) at 9-8, Knight (桂) at 9-7, Knight (桂) at 9-6, Knight (桂) at 9-5, Knight (桂) at 9-4, Knight (桂) at 9-3, Knight (桂) at 9-2, Knight (桂) at 9-1, Knight (桂) at 8-9, Knight (桂) at 8-8, Knight (桂) at 8-7, Knight (桂) at 8-6, Knight (桂) at 8-5, Knight (桂) at 8-4, Knight (桂) at 8-3, Knight (桂) at 8-2, Knight (桂) at 8-1, Knight (桂) at 7-9, Knight (桂) at 7-8, Knight (桂) at 7-7, Knight (桂) at 7-6, Knight (桂) at 7-5, Knight (桂) at 7-4, Knight (桂) at 7-3, Knight (桂) at 7-2, Knight (桂) at 7-1, Knight (桂) at 6-9, Knight (桂) at 6-8, Knight (桂) at 6-7, Knight (桂) at 6-6, Knight (桂) at 6-5, Knight (桂) at 6-4, Knight (桂) at 6-3, Knight (桂) at 6-2, Knight (桂) at 6-1, Knight (桂) at 5-9, Knight (桂) at 5-8, Knight (桂) at 5-7, Knight (桂) at 5-6, Knight (桂) at 5-5, Knight (桂) at 5-4, Knight (桂) at 5-3, Knight (桂) at 5-2, Knight (桂) at 5-1, Knight (桂) at 4-9, Knight (桂) at 4-8, Knight (桂) at 4-7, Knight (桂) at 4-6, Knight (桂) at 4-5, Knight (桂) at 4-4, Knight (桂) at 4-3, Knight (桂) at 4-2, Knight (桂) at 4-1, Knight (桂) at 3-9, Knight (桂) at 3-8, Knight (桂) at 3-7, Knight (桂) at 3-6, Knight (桂) at 3-5, Knight (桂) at 3-4, Knight (桂) at 3-3, Knight (桂) at 3-2, Knight (桂) at 3-1, Knight (桂) at 2-9, Knight (桂) at 2-8, Knight (桂) at 2-7, Knight (桂) at 2-6, Knight (桂) at 2-5, Knight (桂) at 2-4, Knight (桂) at 2-3, Knight (桂) at 2-2, Knight (桂) at 2-1, Knight (桂) at 1-9, Knight (桂) at 1-8, Knight (桂) at 1-7, Knight (桂) at 1-6, Knight (桂) at 1-5, Knight (桂) at 1-4, Knight (桂) at 1-3, Knight (桂) at 1-2, Knight (桂) at 1-1.

桂歩歩

(圖解) 九歩 同 王三歩 ナラズ八 二王二角 ナル九 一玉九歩 同 玉三歩 ナル九 一玉二歩 同 銀九歩 同 玉四飛三桂 打八 九桂 一玉三飛 ナル
 桂三桂 銀二歩 同 銀 桂 ナル 同 玉三銀 一玉二馬 角二歩 一玉二香 ナル

九二歩にて王に取らし八三へ歩ならずして角の引大に良し八二王七二角なり又九一へ玉下る九二歩は同手段に出で、同手段に非ず玉を釣り出し、益、深慮の方略に及ぶ八三歩ナル九一玉八二と銀の時又九二歩を以て玉を釣出し九四飛は籌策間隙なく能勉めたるを謂つべし又金銀を以て合間をすれば速に詰むゆへ桂の間は注意至れり八四桂と打ち九一玉を下らしめ九三飛を捨るは外面へ出るを防ぎ且敵に迫るの妙なり同桂と龍を取り又八三桂と捨駒にて銀を上らしめ九二歩にて銀を取り八三銀と打九一玉又本の居所に返る千變萬化其術究まりなし最後の妙なるは八八馬にして嗚呼面白き哉歩詰の出来難きより苦心を極め終に効を奏す標本として可なり。

詰手之圖 六十其

王	桂	角	飛						
銀	歩	歩	飛						
歩		香	馬						

(圖解) 六金七玉六金 同 玉七角 ナラズ六 六玉六龍七玉七桂 同 七歩七五四龍三玉三龍二玉二龍三玉二龍 同 玉八桂二玉七桂 ナル

此局面簡易に詰むべく見ゆれども爾らず四六歩無き時は速に詰むなり夫が爲に種々手数を要すると知るべし六四金と寄せ續て六五金と王に取らずは龍角の兩用を活用させん緒なり同王と取りし時七三角ならずを妙とす六六王は其方略を避けんと欲せど龍はす五六龍七五玉六七桂同と七六桂同と七六歩打に及びて角の成ざる積功元ならぬを知るべし又角を玉に取せて益々龍を以て尙地步を占む監察の密なる玉終に九三追撃せらる此場合に於て九二龍妙機は間髪を容れず實に輕妙なる手段なり同王八四桂八二王七二桂のなりに其目的を達す。

詰手之圖 七十其

馬									

(圖解) 五馬 同 銀三飛 ナル同 桂三角 ナル五 一玉六歩 ナル同 玉七飛七二飛 ナラズ 一玉七五飛 ナル 一玉六馬 一玉八龍 同 玉八金 同 玉四馬 玉五玉 六銀 四玉 五銀 五玉 四馬 三歩 同 玉四金 同 玉四馬 五玉 六銀 四玉 五銀 五玉 四馬

此局一五馬にて銀に與へ三三飛なりて桂に取らすは一三角の利用にあらずは詰まざるを豫知せる手段と知るべし五三へ角成し時五一へ王其鋭を避けしは危きに見ゆれど然らず是を三二へ避れば三三桂同王三七飛三四合間四五桂三二王三四飛にて速に詰むなり此處大に熟考せよ故に五一王を良しとす此時六一歩なり同玉と取りし時六七飛と廻し最初目算首尾相應じて無用に非ざるを知了せよ又七二王の時六二飛の成らぬも妙なり又九一王と擊退せしめ八二龍の捨ては其當を得たるなり八三歩同王八四金と餌を以て王を釣出す方略なり七四馬と王

詰手之圖

其八十

Shogi board diagram for problem 80. The board is 9x9. Pieces are placed as follows: Row 1: King (1,8), Silver (1,7), Gold (1,6), Horse (1,5), Knight (1,4), Bishop (1,3), Pawn (1,2), Pawn (1,1). Row 2: Pawn (2,8), Pawn (2,7), Pawn (2,6), Pawn (2,5), Pawn (2,4), Pawn (2,3), Pawn (2,2), Pawn (2,1). Row 3: Pawn (3,8), Pawn (3,7), Pawn (3,6), Pawn (3,5), Pawn (3,4), Pawn (3,3), Pawn (3,2), Pawn (3,1). Row 4: Pawn (4,8), Pawn (4,7), Pawn (4,6), Pawn (4,5), Pawn (4,4), Pawn (4,3), Pawn (4,2), Pawn (4,1). Row 5: Pawn (5,8), Pawn (5,7), Pawn (5,6), Pawn (5,5), Pawn (5,4), Pawn (5,3), Pawn (5,2), Pawn (5,1). Row 6: Pawn (6,8), Pawn (6,7), Pawn (6,6), Pawn (6,5), Pawn (6,4), Pawn (6,3), Pawn (6,2), Pawn (6,1). Row 7: Pawn (7,8), Pawn (7,7), Pawn (7,6), Pawn (7,5), Pawn (7,4), Pawn (7,3), Pawn (7,2), Pawn (7,1). Row 8: Pawn (8,8), Pawn (8,7), Pawn (8,6), Pawn (8,5), Pawn (8,4), Pawn (8,3), Pawn (8,2), Pawn (8,1). Row 9: Pawn (9,8), Pawn (9,7), Pawn (9,6), Pawn (9,5), Pawn (9,4), Pawn (9,3), Pawn (9,2), Pawn (9,1).

歩

の接近に臨むに及んで終に大勢定む。

(圖解) 四金 同 香 同 銀五金 同 銀六香 同 銀同 玉六龍 同 玉七馬 同 玉六銀六玉七歩 同 馬五銀五玉六歩 同 馬四銀 四玉五歩 同 馬三銀 三玉四歩 同 馬二銀 二玉三歩 同 馬一銀 一玉二歩 同 馬同 玉四角 ナラズ 一玉二歩 同 馬同 玉四角 一玉九飛二玉二飛 ナル 三玉三龍 二玉四角 一玉一馬 同 玉三龍 一玉 二玉三角 一玉一馬 同 玉三龍 一玉 六金 一玉二金 同 九香 ナル 同 玉 七龍 三玉五桂 四玉 五金 同 玉六銀 九玉 二龍 七玉 七龍 六玉 七龍 五玉 六歩 六玉 三龍

詰手之圖

其九十

Shogi board diagram for problem 90. The board is 9x9. Pieces are placed as follows: Row 1: King (1,8), Silver (1,7), Gold (1,6), Horse (1,5), Knight (1,4), Bishop (1,3), Pawn (1,2), Pawn (1,1). Row 2: Pawn (2,8), Pawn (2,7), Pawn (2,6), Pawn (2,5), Pawn (2,4), Pawn (2,3), Pawn (2,2), Pawn (2,1). Row 3: Pawn (3,8), Pawn (3,7), Pawn (3,6), Pawn (3,5), Pawn (3,4), Pawn (3,3), Pawn (3,2), Pawn (3,1). Row 4: Pawn (4,8), Pawn (4,7), Pawn (4,6), Pawn (4,5), Pawn (4,4), Pawn (4,3), Pawn (4,2), Pawn (4,1). Row 5: Pawn (5,8), Pawn (5,7), Pawn (5,6), Pawn (5,5), Pawn (5,4), Pawn (5,3), Pawn (5,2), Pawn (5,1). Row 6: Pawn (6,8), Pawn (6,7), Pawn (6,6), Pawn (6,5), Pawn (6,4), Pawn (6,3), Pawn (6,2), Pawn (6,1). Row 7: Pawn (7,8), Pawn (7,7), Pawn (7,6), Pawn (7,5), Pawn (7,4), Pawn (7,3), Pawn (7,2), Pawn (7,1). Row 8: Pawn (8,8), Pawn (8,7), Pawn (8,6), Pawn (8,5), Pawn (8,4), Pawn (8,3), Pawn (8,2), Pawn (8,1). Row 9: Pawn (9,8), Pawn (9,7), Pawn (9,6), Pawn (9,5), Pawn (9,4), Pawn (9,3), Pawn (9,2), Pawn (9,1).

歩歩歩歩歩歩金金

本圖は四拾の駒は攻方の飛と桂を除くの外皆盤面に駒を並べ奇變百出 大に意味あり詰方なり起手二四金と打ち香を換ゆるは王の逃道を防ぐ手段と知るべし一五金と捨て二六香は飛車の活用を得る 緒と知るべし二六玉の上りし時一六飛は敏活なる手段にして尙一

七馬は敵玉を塵殺する方術二六銀と打に及びて終に瓦解す敵玉は如斯急撃の手段に遇ひ一筋を心細くも活路を求めつ、應手せり凡て詰手の妙訣とは如斯策略を云ふなり攻方は二へ追詰て馬を取るは又妙なり以下總評實に巧妙なる間髪を入れず一進一退兵機に同じく毫も理に背かず理詰とは如斯を謂ふなり其活用の靈妙なる大に味ふべし。

早指
必勝
定跡
秘法

九ノ一	八ノ一	七ノ一	六ノ一	五ノ一	四ノ一	三ノ一	二ノ一	一ノ一
九ノ二	八ノ二	七ノ二	六ノ二	五ノ二	四ノ二	三ノ二	二ノ二	一ノ二
九ノ三	八ノ三	七ノ三	六ノ三	五ノ三	四ノ三	三ノ三	二ノ三	一ノ三
九ノ四	八ノ四	七ノ四	六ノ四	五ノ四	四ノ四	三ノ四	二ノ四	一ノ四
九ノ五	八ノ五	七ノ五	六ノ五	五ノ五	四ノ五	三ノ五	二ノ五	一ノ五
九ノ六	八ノ六	七ノ六	六ノ六	五ノ六	四ノ六	三ノ六	二ノ六	一ノ六
九ノ七	八ノ七	七ノ七	六ノ七	五ノ七	四ノ七	三ノ七	二ノ七	一ノ七
九ノ八	八ノ八	七ノ八	六ノ八	五ノ八	四ノ八	三ノ八	二ノ八	一ノ八
九ノ九	八ノ九	七ノ九	六ノ九	五ノ九	四ノ九	三ノ九	二ノ九	一ノ九

参考

七六三四 歩
ハ角先ニ當リ

二六八四 歩
ハ飛先ナリ

速成上達新式將棋講義

一〇八

六六銀歩同歩銀歩七五銀歩四七銀歩九五歩同歩九六角七角六同飛金七五飛歩七六歩四七九三同歩九四九五同歩六七九三金九九七七八飛)

向飛車甲

七六三四歩歩四四三四歩角銀歩四二五六天右四三六八銀七五三五銀六八銀八二七五三五銀六八銀八二七五三五銀六八銀八二七五三五

九六九四桂歩金歩六六六四四五六三銀四七四四六八二銀七二六八金七三桂歩一六二九

飛角六二歩同四五五五銀九七五三銀四四四四銀二三四銀)

○六一角處飛歩四六五同四四四同銀四三同飛銀五二四二二六三同金五二

○六一角處飛歩四六五同四四四同銀四三同飛銀五二四二二六三同金五二

角處五二歩六五角歩四同角同銀同右六四歩四同二二角打)

美濃掛

七六三四歩歩六六三五七八三二五六三六歩同飛銀六七三四三七六二七七二八八八二八六七二八五九四

九六五二四八四二三八一四一六五四八四歩同飛同銀八三八八五三三九九四三九九七五

王金王銀歩同歩九四一三同歩打歩打歩一七同飛桂香二五〇一六三六同銀同三七一七角桂銀三九一七桂銀王桂

大正九年十一月廿一日印刷
大正九年十一月廿五日發行

(正價金貳圓也)



編纂者 將基研究會
發行者 東京神田錦町二丁目三番地 辻根林三郎
印刷者 東京京橋本八丁堀一ノ十五 秋場熊太郎
印刷所 東京京橋本八丁堀一ノ十五 秋場印刷所

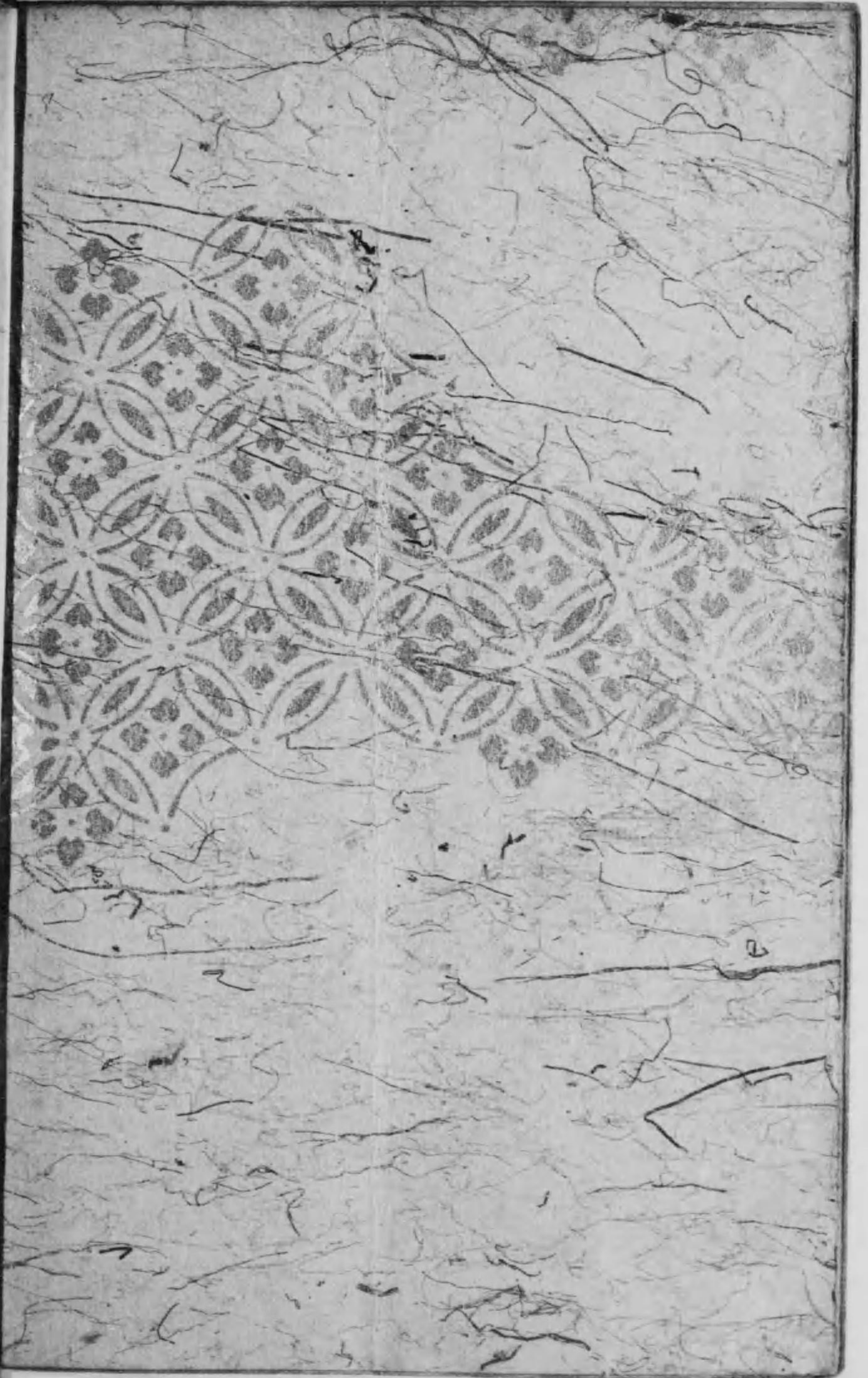
發行所

東京市神田區錦町二ノ三

富久屋書店

電話神田三四五七番
振替東京二九八二三番

11
401



終

